学力検査 **国語 第一回** 解答用紙

答えは、すべて、この解答用紙に書き、解答用紙だけ提出しなさい。
解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「 」などの記号も文字数に数えること。

一

(1) 20 10

(3)

(4)

(5) 20 10 30 40 50

二

(1) (う)

(2) (む)

(3)

(4)

三

(1)

(2) (う)

(3)

(4)

四

(1) ① ②

(2) B C

(3) ① ②

五

(1)

(2)

(3) 20 10 30

(4)

(5) ① ②

六

(1)

(2)

(3)

(4) ① ②

(5)

七

(1) 20 10

(2)

(3)

(4) 10 20 30 40

(5)

10行 9行 8行 7行 6行 5行 4行 3行 2行 1行

受検番号

氏名

総得点

学力検査

国語

問題用紙

空をかついで

石垣(いしがき)りん

肩(かた)は
首の付け根から
なだらかにのびて。
肩は
地平線のように
つながって。
人はみんなで
空をかついで
きのうからきょうへと。
子どもよ
おまえのその肩に
おとなたちは
きょうからあしたを移しかえる。
この重たさを
この輝(かがや)きと暗やみを
あまりにちいさいその肩に。
少しずつ
少しずつ。

※注意　各ページのすべての問題について、解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「　」などの記号も字数に数えること。

一　放送で聞いたことをもとに、次の(1)～(5)の問いに答えなさい。

(1)　高木さん(生徒)は、この詩がどんな様子を表していると思いましたか。**二十字以内**で書きなさい。

(2)　高木さんは、「空」とは何をたとえたものだと思いましたか。**一単語**で書きなさい。

(3)　高木さんは、この詩を二つに分けるとして、後半はどこから始まると答えましたか。資料として示されている詩の一行を**抜き出して**書きなさい。

(4)　先生が助言した内容として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　言葉を大切にして読めば、豊かなイメージを持つことができる。

イ　印象に残る言葉を意識することで、新たなイメージがわいてくる。

ウ　音読を何度も繰り返すことで、詩のリズムを感じることができる。

エ　ゆっくりと音読すれば、詩の内容を深く理解できるようになる。

(5)　高木さんは詩の後半の「重たさ」「輝き」「暗やみ」はどんなことを表していると考えましたか。**五十字以内**で書きなさい。

二　次の(1)～(4)の――の漢字の読みを、**ひらがな**で書きなさい。

(1)　母を慕う子どもたち。

(2)　授業中は私語を慎む。

(3)　これは重宝な品物だ。

(4)　目の前で消滅する。

三　次の(1)～(4)の――のカタカナの部分を、**漢字**で書きなさい。

(1)　彼の意志はハガネのように固い。

(2)　監督の指示にシタガう。

(3)　友人とのヤクソクを守る。

(4)　計画をメンミツに練る。

四　伊藤さんの学級では、国語の時間に一分間スピーチをすることになりました。次に示すのは、伊藤さんのスピーチ原稿の下書きです。それを読み、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

先日、私が祖母に「学級会の話し合いで話が煮詰まって、とうとう文化祭で何をやるか決まらなかった」と話すと、祖母は「『煮詰まる』の意味が違う」と言い[A]ました。そこで、国語辞典で意味を調べると、「［　B　］こと」とありました。友だちに聞くと、口をそろえて「［　C　］こと」と答えました。私は、国語辞典の意味と私たちが使う意味とが違っていることを不思議に思い、図書館で調べてみました。文化庁が実施した「国語に関する世論調査」によると、「煮詰まる」の意味を、39歳以下では7割前後の人が「C」と考えているが、40～49歳では、「C」と考えている人と「B」と考えている人が半数ずつあり、50歳以上では、ほぼ全員の人が「B」と考えている、[D]という内容が読み取れたので、「煮詰まる」の意味の取り方は、世代によって違っているということがわかりました。

(1)　文章中の[A]言い　を適切な敬語に直す場合、

①　その敬語の種類を、次の**ア**～**ウ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　尊敬語　　**イ**　謙譲語　　**ウ**　丁寧語

②　その敬語と同じ種類の敬語を、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　召し上がります　　**イ**　ごらんになります

ウ　ございます　　**エ**　いただきます

(2)　文章中の［　B　］［　C　］に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちからそれぞれ一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　議論や考えの対立がおさまらず、結論が出せない

イ　議論や考えなどがほぼまとまって、結論が出せる

ウ　議論や考えを検討するため会議を後日に延期する

エ　議論や考えを整理するために会議を中断している

(3)　文章中の[D]という内容が……わかりました。を意味を変えずに二つの文に分けて次のように書く場合、［　①　］・［　②　］に入る言葉をそれぞれ書きなさい。ただし、［　②　］はあとの**語群**から選ぶこと。

②の語群

しかも・なぜなら・けれども・したがって・むしろ

という内容が読み取れ［　①　］。［　②　］このことから「煮詰まる」の意味の取り方は、世代によって違っているということがわかりました。

五

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

〔次の文章には、後日実施される遠泳大会に出場することにした太とヤッチン（やすお）が、遠泳の指導を引き受けてくれた米田老人の指示で、第一ブイ（海上にある標識）から第二ブイまで泳ぐ場面が描かれている。〕

海はまわりになにもさえぎるものがないせいだろうか、五十メートルほど先の第二ブイの白旗が、すぐそこに見えていた。まだ一度も行ったことがなかったが、カエル泳ぎとあおむけ寝っころがり休憩をまぜれば、なんとか行ける気もした。

米田老人がまだなにかいってたが、A耳には入らなかった。心の中で、よけいなことは考えずにわあっといこう、Bわあっといこうとさけんでいたからだ。

（もともと無理なことやってんだ。なにかわあっとやりたくて、遠泳に参加しようとしてんだ。わあっといこう。わあっと。）

わあっといこう、と心でわめきながらざぶっと体を前にたおした。

うしろのほうで、C米田老人がなにかあわてたような声を出していたが、太はもうふりかえる余裕などなかった。

それからあとは、必死だった。とにかくおぼれて死にたくないだけだった。波の間に見えかくれする第二ブイの白旗めざして、力のかぎり泳いだ。まわりにほかの海水浴客がいたはずなのに、まったくD目に入らなかった。力をぬいてらくに泳がねばならないはずなのに、力いっぱいの泳ぎになっていた。

息がみだれてすぐに苦しくなる。おちつけ、ゆっくり泳げ、と自分にいいきかせているのに、両手は必死に水をかいていた。

白旗がすぐそこに見える。そのくせなかなか近づかない。波にゆれて、上下左右に旗が動いていた。

あと十メートルのところで、体がずしんと重くなった。おぼれるっ。めちゃくちゃな犬かき泳ぎになった。ゼヒイゼヒイと息が苦しい。あと五メートル、三メートル、がぶっと水を飲んだ。息がつまって目をむいた。しずみかけていた。夢中で右手をのばしたら、オレンジ色の第二ブイだった。必死で丸いブイにしがみつく。ゲホゲホッとせきこんだ。それでも生きていた。しがみついたブイには白旗が立てられていた。見あげると、真っ青な空を背景にゆうゆうとはためいていた。息はまだみだれていたが、なぜか恐怖心はなくなっていた。とたんに海水浴客の声が耳に入ってきた。体はまだ水をこわがってどきどきしていたが、（やったあ。）と気持ちはうきたった。はじめて白旗まで来れたんだ。

ふりかえると、米田老人とヤッチンが、浜を背にして第一ブイのそばに立っているのが見えた。米田老人はおどろいたように口をあけている。

ヤッチンがこくっとうなずいたように見えた。そしていきなり泳ぎはじめた。太がやれたことに安心したのか、ヤッチンの泳ぎはおちついていた。ついてこないといったはずの米田老人も、ヤッチンのあとから泳ぎはじめた。

「ヤッチーンッ。」

と太は意味もなくさけんだ。

うれしかった。ブイにしがみついたまま、もう一度さけんだ。

ヤッチンは真剣な目を水面に光らせて近づいてくる。あまりうまいとはいえない泳ぎだったが、おぼれかけた犬が盆おどりしているような太の泳ぎよりはるかにましだった。

あと十メートル、五メートル、三メートル、一メートル。やったあっ。

ヤッチンは水を顔中に光らせて、わらってゴールイン。そして太の目の前ですっと立った。

「太もすっげえな。根性泳ぎだね。」

と白い歯を見せた。

第二ブイのあたりは浅いらしく、あとから到着した米田老人もすっと立った。ブイにしがみついているのがはずかしく、太もそうっと足をのばしてみた。ひやっと冷たい砂が足先にふれた。

「まさか、いきなりほんとに泳いでいくとは思わんかった。」

と米田老人は、信じられないことをいった。

「じょうだんでいったの？」

と太は砂に立ちながらきいた。

「じょうだんというのではないが、まあなんだ、とりあえずはおまえたちの勇気をためすつもりじゃった。」

米田老人はひとつせきばらいをした。

「わあっ。ひどいよ。もし途中でおぼれたらどうするつもりだったの。」

「まさか泳ぐとは思わんかった。じゃが、なんというか、つまり泳げたじゃないか。な。そうじゃ。ひょっとすると、ひょっとするかもしれん。」

米田老人は苦しいいいわけに、最後はふひゃふひゃとわらってごまかした。

E海の泳ぎを知っているヤッチンは、このあたりまでは何度も来ているらしかった。

「太。帰りはもっとゆっくり泳いでみろよ。いっしょに行くから。足の立つところも知ってるからさ。」

「ふひゃふひゃ。それがいい。自信がつくはずだ。」

と米田老人は浜のほうにふりむいた。

（横山充男『少年の海』による。）

(1) 文章中に A耳には入らなかった、 D目に入らなかった とあるが、そのときの太の心の状態を表現している言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　A＝不安　　D＝孤独
イ　A＝恐怖　　D＝冷静
ウ　A＝放心　　D＝恐怖
エ　A＝やけくそ　　D＝必死

(2) 文章中に B わあっといこうとさけんでいた とあるが、そのときの太の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　経験がないので不安な心の状態を見せたくない気持ち。
イ　自分の度胸を見せようと無理を承知で挑戦する気持ち。
ウ　米田老人に自分のいいところを見せたいという気持ち。
エ　泳ぎの得意なヤッチンに負けたくはないという気持ち。

(3) 文章中に C米田老人がなにかあわてたような声を出していた とあるが、それはなぜか。「……とは思わなかったから。」という形で**三十字以内**で書きなさい。

(4) 文章中に E 海の泳ぎを……何度も来ているらしかった とあるが、文章中の傍線Eより前の部分から、そのことがうかがえる一文を**抜き出して、十六字**で書きなさい。

(5) この文章の後半における太の気持ちの変化を説明した次の文の ① ・ ② に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**それぞれ書きなさい。ただし、① は**五字**、② は**九字**で抜き出すこと。

> 第二ブイまで泳ぐことができた太の ① 気持ちは、ヤッチンと米田老人が第二ブイに向かって泳ぎはじめたことにより、さらに大きくなった。そのことは、ヤッチンに二度も ② という太の様子からもうかがえる。そして、ヤッチンもゴールインしたことにより、太の気持ちは最高潮に達したのである。

六

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

孔子の弟子である子貢(しこう)が、旅の途中で、汗にまみれながら畑を耕(a)している老人に出会った。老人は井戸から瓶(かめ)に水を汲(く)み、えっちらおっちら畑に運んでいる。労力ばかりかかって、いっこうに能率があがらない。子貢は見かねて、

「水汲みなら、はねつるべ(注1)という便利な機械がある。それを使(b)えばわずかな労力で簡単に水を汲み出すことができますよ。」と教(c)えてやった。

すると老人は、

「それぐらい知っているさ。だが、機械を持っていると、機械を使う仕事(機事(きじ))が増える。そうなると機械に頼る気持ち(機心(きしん))が生まれて、ますますそれに頼(d)ろうとするだろう。機械に頼るばかりになってしまったら、いったい、どこに人間の精神が残るというのかね。わしは道具を知らずに使わないのではない。そんなものを使うことで、精神が汚れるのがいやなのさ。」と答えた……。『荘子(注2)』に書かれた話である。

人間は、たいへん非力な生き物だ。だからこそ、その力を補うために道具(A)を生み出してきた。それによって文明が興(おこ)り、文化が創造されたのである。人類の歴史は、つねに機械の発明・発達史とともにあった。いや、道具や機械の発達こそが、人類史を織りなしてきたと言うべきであろう。

では、なぜ、人間は道具を発明してきたのか。なにより、自然から身を守るため、生活の糧(かて)を得るためだ。つぎに、自分の肉体を使う日々の労働から解放されて楽をしたい、という欲求のゆえだった。どうして楽をしたいのか。もっと心豊かに暮らしたい、と考えたからである。それには生きていくための労働を最小限にとどめ、それによって得た時間を、

人生の愉しみに当てるようにしなければならない。そこで、人間は必死になって、より便利な道具や機械を発明してきたのだ。

ところが、どうだろう。その結果、皮肉なことに、荘子が説いた「機心」がふくらんで、人間は機械に頼るばかりになり、そのあげく、生活はいっそう忙しくなっていった。そして、人間の精神は、いよいよ貧しくなってしまったのである。

便利になれば時間が余るはずなのに、その余った時間に「機事」が入り込む。産業革命の動力源となった蒸気機関が発明されると、それを利用して、数々の機械が生み出された。

「さあ、機関車を作れ！　レールもいるぞ。工場にはもっと人手が必要だ！」

こうして機械の発明は、さらなる労働を要求することになった。

いや、二百年も前の例をあげるまでもない。夜遅く、都心の高層ビルを見上げてみるといい。深夜近くまで明かりが消えることがない。みな、働いているのだ。コンピューターが面倒な計算を瞬時にやってくれるなら、人間はもっと楽になって、一週間に一日だけ働けばいいくらいの余裕を持ち得るはずではないか。

だが、そうはならない。「機事」が「機心」を増大させ、「機心」が仕事をいよいよ増やしていく、という果てしないイタチゴッコが始まったのだ。そのあげく、 B は、どんどん奪(むい)(注3)われてしまった。愉しみのための時間、思索の時間、あるいは無為に過ごすゆとりの時間が。そして、しまいには心の平安までが奪われてしまうのだ。この成り行きは、まさに文明の逆説(注4)でなくてなんだろう。

しかし、だからといって、ぼくは原始生活に戻れ、などと言うつもりはない。ただ、これからの世界では、「何のために？」という目的意識を持たないかぎり、人間らしく生きることがいよいよ困難になっていく、ということを警告したいのだ。

でなければ、我々は、荘子が教えたように(C)、ただ「機事」に追いまくられながら生涯をかけぬけ、「機心」のまま死んでゆくことになってしまうであろうから。

（森本哲郎『この言葉！』による。）

（注1） はねつるべ＝てこの原理を応用した、井戸水を汲み上げるための機械。
（注2） 『荘子』＝中国古代の思想家である荘子(荘周)の著書の名。
（注3） 無為＝何もしないこと。
（注4） 逆説＝一般に真理とみとめられているものに反する説。

(1) 文章中のa～d(a・b・c・d)の四つの動詞のうち、一つだけ**活用の種類の異なるもの**がある。その符号を書きなさい。

(2) 文章中に A 道具を生み出してきた とあるが、人間が最初に「道具」を生み出したときの理由が最もよくわかる一文を、文章中から**抜き出してはじめの五字**を書きなさい。

(3) 文章中の B に入る言葉を、「心」という言葉を使って**十字以内**で書きなさい。

(4) 文章中に C 荘子が教えたように とあるが、『荘子』に書かれた話の中の一部をまとめた次の文の ① ・ ② に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**それぞれ書きなさい。ただし、① は**五字**、② は**十六字**で抜き出すこと。

> 子貢が出会った老人は、子貢に教えられなくても、① という便利な機械を使えば、② ことができるということくらいは知っていた。

(5) あなたは「人間らしく生きること」についてどう考えますか。次の**条件**にしたがい、**注意事項**を守って書きなさい。

(条件)

① 本文は**二段落構成**とし、**八行以上、十行以内**で書くこと。

② 前段では、文章中の「人間らしく生きること」とは何かを簡潔にまとめること。

③ 後段では、文章中の「人間らしく生きること」に対するあなたの意見とその根拠を書くこと。

(注意事項)

① 氏名や題名は書かないこと。

② 原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。

ただし、〜〜や――などの記号を用いた訂正はしないこと。

七 次の文章を読み、あとの(1)〜(5)の問いに答えなさい。

A 桜といふ花こそ万の花にも勝れに B 。この花、唐国(注1)には生ひず、我が大和の国にのみありて、めでたき花の限りなりけり。昔、唐国より引き来て C 植ゑしといふ梅の花、亦 D めでたき花なりといへども、時いと早くして、ふる雪にまじり咲き出たる、見る袖も寒けかりけり。すべて一年のうちにも、やよひの頃ぞいと比ひなき。(比べるものがないほどすばらしい) 久方(注2)の光麗かに、足引(注3)のあらしの音も静かなるに、白雲のかかるがごとく咲き匂ひたる E 桜の花にしく物なんなかりける。

（鹿持雅澄『山斎集』による。）

（注1） 唐国＝中国の昔の呼び名。

（注2） 久方の＝光などにかかる枕詞。

（注3） 足引の＝山などにかかる枕詞。ここでは「あらし」にかかっている。

(1) 文章中に A 桜といふ花 とあるが、「桜」についてこの文章からどのようなことが読み取れるか。**二十字以内**にまとめて書きなさい。

(2) 文章中の B に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**〜**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア たり　**イ** たる　**ウ** たれ　**エ** たろ

(3) 文章中の C 植ゑしといふ を現代仮名づかいに改め、**すべてひらがな**で書きなさい。

(4) 文章中に D めでたき花 とあるが、具体的に何がどうだと言っているのか。**四十字以内**で書きなさい。

(5) 文章中の E 桜の花にしく物なんなかりける の意味として最も適当なものを、次の**ア**〜**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 桜の花は咲く時期がほんとうに短いものだよ。

イ 桜の花は香りが強すぎてよくないものだよ。

ウ 桜の花ほど雪に似合うものはないことだよ。

エ 桜の花にかなうものなど他にはないことだよ。

学力検査 **国語 第二回** 解答用紙

答えは、すべて、この解答用紙に書き、解答用紙だけ提出しなさい。
解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「 」などの記号も文字数に数えること。

一

(1) 20 10

(2) 20 30 40 50 10

(3)

(4)

(5) 10

二

(1) (う)

(2) (える)

(3)

(4)

三

(1) (かる)

(2) (らす)

(3)

(4)

四

(1) ① ②

(2) ① ②

(3)

五

(1)

(2) 20 30 10

(3)

(4)

(5) ① ②

六

(1)

(2)

(3)

(4) ① ②

(5) 10行 9行 8行 7行 6行 5行 4行 3行 2行 1行

受検番号

氏名

総得点

七

(1) 心不同如面

(2) 水 容器

(3)

(4)

(5) 20 30 40 10

学力検査

国語

問題用紙

ぶらんこ

高田敏子（たかだとしこ）

雲をける
風をきる
光のしまをつきぬける
ぱっとひらける視野！
　生けがきのむこうに
　さっきおこったばかりのママが
　ミシンをふんでいる
　鶏小屋のうしろに
　タンポポが咲いている

空の手に抱かれるたびに
少女の眼はステキなものを
とらえる

子どもの背たけが
すくっと　のびるのは
こんなときではないかしら

※注意　各ページのすべての問題について、解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「　」などの記号も字数に数えること。

一　放送で聞いたことをもとに、次の(1)～(5)の問いに答えなさい。

(1)　中井さん(生徒)は、この詩の第一連と第二連にはどんなことが描かれていると思いましたか。**二十字以内**で書きなさい。

(2)　(1)のように中井さんが思った理由を**五十字以内**で書きなさい。

(3)　中井さんは、先生の音読を聞いて、どの行に少女の感動と驚きが表れていると思いましたか。資料として示されている詩の一行を**抜き出して**書きなさい。

(4)　「空の手に抱かれる」という表現を、中井さんが面白いと思った理由として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　擬人法を使って表現されており、空とぶらんこの様子が面白いものに感じられるから。

イ　擬人法を使って表現されており、空とぶらんこが目の前にあるように感じられるから。

ウ　擬人法を使って表現されており、空とぶらんこが生き物のように感じられるから。

エ　擬人法を使って表現されており、母の子どもへの思いがありありと感じられるから。

(5)　中井さんは、どんなことがこの詩の主題になっていると思いましたか。**十字以内**で書きなさい。

二　次の(1)～(4)の――の漢字の読みを、**ひらがな**で書きなさい。

(1)　器具を大切に扱う。

(2)　塩分を控える。

(3)　本音を暴露する。

(4)　インフルエンザの潜伏期間。

三　次の(1)～(4)の――のカタカナの部分を、**漢字**で書きなさい。

(1)　友人から本をアズかる。

(2)　食事の量をへらす。

(3)　オンダンな気候に恵まれる。

(4)　彼の気持ちをスイサツする。

四　千葉さんの学級では、国語の時間に一分間スピーチをすることになりました。次に示すのは、千葉さんのスピーチ原稿の下書きです。それを読み、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

私は、去年〇〇保育園で職場体験をしました。A働くという体験は初めてだったので、とまどうことも多かったのですが、なんとかやり遂げることができ、ほっとしたことをおぼえています。

私が職場体験に参加して感じたことは、職場の方への感謝の気持ちです。先生方は子どもたちのことで忙しいのに私たちにも気をつかってくれましたB。

私は職場体験に参加して、将来、子どもたちとふれ合う仕事に就きたいと思いました。帰るときそばにかけよってきた子どもたちに「楽しかったよ。また来てね。」と言われて、私は充実感を覚えたからです。

C　ありがとうございました。

(1)　文章中のA働くという体験は……おぼえています。を意味を変えずに二つの文に分けて次のように書く場合、①・②に入る言葉をそれぞれ書きなさい。ただし、②はあとの**語群**から選ぶこと。

働くという体験は初めてだったので、とまどうこともたくさん①。②なんとかやり遂げることができ、ほっとしたことをおぼえています。

②の語群

なぜなら・むしろ・それでも・ですから・しかも

(2)　文章中のBくれましたを適切な敬語に直す場合、①その敬語の種類を、次の**ア**～**ウ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　尊敬語　　**イ**　謙譲語　　**ウ**　丁寧語

②その敬語と同じ種類の敬語を、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　さしあげる　　**イ**　召し上がる

ウ　ございます　　**エ**　いただく

(3)　文章中のC に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　ご参観

イ　ご拝見

ウ　ご静聴

エ　ご拝聴

五

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

〔ぼくと純一は中学生で、競技用の鳩を飼育している仲間である。柴崎さんは鳩の専門店の主人で、競技用の鳩の飼育の専門家であり、ぼくらのよき理解者でもある。
ぼくらは、柴崎さんの厚意で手に入れることができた、紅栗(注1)をはじめとする数羽の立派な鳩を、できたばかりの自分たちの鳩小屋に放そうとしていた。〕

ぼくと純一が、籠を持ってハシゴを登り、あとから柴崎さんがついてきた。小屋にはいってぼくらが籠を床におくと、A柴崎さんが金網の外からうなずいた。純一がまず籠の小さな口から手をいれて、器用に一羽の灰ゴマ(注2)をつかみ出した。ぱっと手をはなすと、その鳩はゆったりあたりを見まわし、段になった巣箱のいちばんうえに飛びあがった。ゆうゆうとしていて、人間を恐がるようすがなかった。よっぽど大事にされていたんだ、とぼくは思った。ちょっぴりそいつが憎らしかったけれど、この鳩たちは人間を恐がらないのだとわかって、ぼくはかなり安心した。つきあう相手が不安がるほど、ぼくらを不安にすることはない。柴崎鳩舎の鳩はみな、まるで生まれたときからそこにいるといったふうに落ち着きはらっていた。それに比べたら、ぼくの二引き(注3)はまったくドバト(注4)のようで、ぼくはくやしいような情けないような気がした。B柴崎さんが二引きをほめてくれたのは、きっとお世辞なのだとぼくは気づいて、かなりがっくりした。純一の籠がおわって、いよいよぼくが紅栗にさわるときがきた。C ぼくの籠にはつがいが二つはいっていた。ぼくの手がふるえているのを見て、純一がにっとわらった。紅栗はとりわけ悠然としていた。ぼくがふたを開けて手をいれると、おどろいたことに紅栗が籠のなかでぐるっぽぐるっぽ威嚇のダンスをはじめた。ぼくは思わず純一の顔に目をやり、それから柴崎さんをふりかえった。柴崎さんがにやっとして、励ますようにうなずいた。

ぼくはちょっぴり紅栗がこわかったので、他の鳩たちをまずつかみ出した。それから、そっと紅栗に手を近づけると、その鳩はほかの鳩のように手から逃げようとするのではなく、しっかり踏みとどまってぼくの手をつつこうとした。そんなに威張っている鳩を、ぼくはみたこともなかった。それはふしぎな気分だった。ぼくはそれまでこっちが飼い主だと思って、あたりまえのように鳩たちを見くだしていた。鳩たちを無条件に見くだせるやつらだと思うから、ぼくはとても気分がよかったのだ。ところが、この紅栗は……ぼくの目になぜかなみだが浮かんだ。悲しいのか口惜しいのかうれしいのか、なにかあきらめたような不思議な気分だった。いくら立派なやつでも、こいつはここの主人ではない。ぼくはつつかれるのもかまわず、紅栗をしっかりとつかみ籠から出した。ほかの鳩よりも一まわりおおきく、骨格もつばさの張りぐあいもずっしりとした手ごたえだった。ぼくはかなり感動して紅栗を自由にしてやった。すると、紅栗は飛んでいこうともせずに、そのまま床でD ぼくにむかって威嚇のダンスをはじめたのだ。

「すげえや」純一がつぶやいた。

ぼくが立ちあがって柴崎さんをふりかえると、柴崎さんは微笑していた。

気がつくと、おとなも子どもも男も女も、鳩舎のなかを見あげて目をかがやかせていた。みんなにこにこしていた。なにがあったか知っているのは、たぶんぼくと柴崎さんと純一だけだった。紅栗はもうじぶんの巣箱を選んで、こんどは鳩たちにむかって威嚇のダンスをしていた。いや、ぼくにはそれがあたり一帯のすべての生きものたちに対して、なわ張りを宣言しているように思えた。

「びっくりしたかい？」柴崎さんがいった。「ああいう気性だから、千キロも遠くからまっしぐらにじぶんの巣に帰ってくるのさ。日本一の血統だ。大事にしてくれよな」

E ぼくはあやふやにうなずいた。なんだか、心が打ちのめされていた。なぜなのか理由はわからなかった。ひとつには、紅栗があんなに立派に見えたのは、見かけだけではなかったのだ。それはうれしかったが、その気性をじかにぶつけられてぼくはうろたえていた。それは思ってもいなかった経験だった。もうひとつは、それにたじろいだぼくは、ぜんぜん立派ではなかった。F紅栗を飼う資格など、もしかしたらないのかもしれなかった。柴崎さんは親切に、それをぼくに譲ってくれて、大事にしてくれといっているが、ぼくにはどうしたらそんな鳩を大事にすることになるのかわからなかった。

（冬川亘『紅栗』による。）

（注1）紅栗＝あざやかなレンガ色をした羽色のため、そう呼ばれている鳩。この紅栗は、柴崎さんの折り紙つきの最高の鳩である。
（注2）灰ゴマ＝灰色の羽色にゴマをまぶしたような斑点が入っているため、そう呼ばれている鳩。
（注3）二引き＝灰色の羽色に黒い横線が二本入っているため、そう呼ばれている鳩。
（注4）ドバト＝神社や寺や公園などに居ついている鳩。

(1) 文章中に A 柴崎さんが金網の外からうなずいた とあるが、そのときの柴崎さんの様子として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア ぼくと純一の行動を優しく見守っている様子。
イ ぼくと純一の行為に少し不安を持っている様子。
ウ 自分の命令に従うぼくと純一に満足している様子。
エ 大胆に動き回るぼくと純一におどろいている様子。

(2) 文章中に B 柴崎さんが……かなりがっくりした とあるが、ぼくがこのように思った理由を、「……と思ったから。」という形で**三十字以内**で書きなさい。

(3) 文章中に C ぼくが紅栗にさわるときがきた とあるが、ぼくが紅栗にさわったときの確かな感触が述べられている一文を、文章中から**抜き出して、はじめの五字**を書きなさい。ただし、会話文は除くこと。

(4) 文章中に D ぼくにむかって威嚇のダンスをはじめた、 E ぼくはあやふやにうなずいた とあるが、そのときの「ぼく」の心の状態を表現している言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア D＝不安　E＝悲しみ
イ D＝恐怖　E＝喜び
ウ D＝驚き　E＝とまどい
エ D＝失望　E＝感動

(5) 文章中に F紅栗を飼う……ないのかもしれなかった とあるが、ぼくがこう思った理由の一つを説明した次の文の ① ・ ② に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**それぞれ書きなさい。ただし、 ① は**七字**、 ② は**十一字**で抜き出すこと。

> その理由の一つは、 ① だと思って、 ② ぼくの考えが、紅栗に通じなかったからである。

六 次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

情報化社会とは、ハード(情報機器)よりもソフト(情報内容)が重視される世の中のことだ。ソフト重視の世の中では、何よりも一人ひとりの人間が個性的であることが求められる。個性的といっても、なにもすべての人々が奇妙な振る舞いをしたり、一芸に秀でなければならないという意味ではない。これまでの日本人のような均質で画一的な生き方をするのではなく、それぞれが個人として自分なりの考え方や生き方を持つということだ。

ところが、情報源をマスメディアだけに頼っていると、みんなが似たような知識の断片を共有することになる。その結果、どの人も同じような物の見方や考え方をするようになってしまうわけだ。ワイドショーでXさんのコメントを聞いた人はXさんの意見、新聞でYさんの解説を読んだ人はYさんの意見を、それぞれ、さも A かのように語っているだけ。これではいくら「情報」を集めているつもりでも「個」を確立することができず、ソフト重視の情報化社会に逆行することになる。

本来、情報は各個人が自分独自の考え方や生き方を形成するための素材となるべきものだ。(注1)オーダーメイドの洋服をつくるための生地に当たるのが情報だといえばいいだろう。そうなって初めて、情報化社会は個性にあふれたものになる。

世の中にあふれている情報に流されずに自分らしい考え方や生き方をつくり上げるためには、いったい何をどうすればいいのかと、途方に暮れる人もいるだろう。でも、情報がメディアの中にあるものだという先入観さえ捨てれば、これはそんなに難しい話ではない。もともと情報というのは公的(パブリック)な場所にあるものではなく、一人ひとりの人間が持っている私的(パーソナル)なものだと思う。

だいたい情報という言葉に含まれている「情」という文字は、無味乾燥な客観性を意味するものではないだろう。情熱、感情、情念といった言葉と同様、「情報」にも人間らしい主観的な判断や感覚が必要なのだ。これは、明治、大正期の代表的作家である森鷗外がドイツ語から翻訳した言葉らしい。B さすがは森鷗外、最初から情報の本質を見抜いていたに違いない。

したがって、主観的な情報、一人の人間の個人的な価値観や経験などによる偏った見方や物の考え方を含む情報こそ、本物の情報だといえる。極論すればテレビのキャスターのコメントではなく、近所のおばさんの世間話の中に情報はあるのだ。なかには偏見に満ちているものもあるだろうし、独善的なものもあるだろう。でも、拒絶する必要はない。それも一つの見方として受け入れて、参考にしていけばいい。自分の生き方や考え方をつくるための素材にすべきなのは、そういう生々しい情報なのだ。

これらの「情報」を与えてくれるのは、人間しかいない。つまり、自分なりの情報ネットワークをつくるということだ。そのため情報化社会では、(注2)ビジネスライクな人脈ではなく、生活レベルでの深いつながりが重要になってくる。

いろいろなタイプの友だちがいれば、それだけ物の見方や考え方は幅広くなる。自分とは正反対の意見を持っている友だちもいれば、意外な角度からの視点を与えてくれる友だちもいるだろう。かけ離れている存在だからこそ、つきあっていて面白いということもある。そのネットワークはマスメディアとはまったく違う個人的なネットワークだから、そこから得た素材によってつくり上げた意見や発想は、間違いなく自分独自のものになる。それが自分の個性だ。そして、友だちの数が多ければ多いほど、そこからつくり上げられた個性は豊かなものになる。

(横澤彰『大人のための友だちのつくり方』による。)

(注1) オーダーメイド＝注文によってつくること。
(注2) ビジネスライク＝事務的に事を運ぶさま。

(1) 文章中の a・b・c・d の四つの動詞のうち、一つだけ**活用形の異なるもの**がある。その符号を書きなさい。

(2) 文章中の A に入る言葉を、「意見」という言葉を使って**十字以内**で書きなさい。

(3) 文章中に B さすがは森鷗外……見抜いていたに違いない とあるが、筆者がここで考えている「情報の本質」をまとめた次の文の に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**、**九字**で書きなさい。

> 情報には、人間らしい が必要なのだということ。

(4) 文章中に C「自分の個性」とあるが、ここでいう「自分の個性」を説明した次の文の［①］には**十三字以内**、［②］には**五字**で、それぞれに入る適当な言葉を書きなさい。ただし、［②］は文章中から**抜き出す**こと。

> 自分の個性とは、［①］から得た素材によって自分独自につくり上げた［②］のことである。

(5) あなたは「ソフト重視の世の中での個性」についてどう考えますか。次の**条件**にしたがい、**注意事項**を守って書きなさい。

（条件）

① 本文は**二段落構成**とし、**八行以上、十行以内**で書くこと。

② 前段では、文章中の「ソフト重視の世の中での個性」とは何かを簡潔にまとめること。

③ 後段では、文章中の「ソフト重視の世の中での個性」に対するあなたの意見とその根拠を書くこと。

（注意事項）

① 氏名や題名は書かないこと。

② 原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。

ただし、〜〜や――などの記号を用いた訂正はしないこと。

七

次の文章を読み、あとの(1)〜(5)の問いに答えなさい。

A心ノ不同ハ如ごとシ面ノ、譬たとへバ如シ二水ノ随したがフガ一レ器モノニ。

書き下し文

（心の不同は面の如し、譬へば水の器ものに随ふが如し。）

人のかほといふものは、千万人あつめてもおなじおもてをもちたるものはなきなり。人の心も、そのごとくに、千万人の中にもおなじやうなる心をもちたるものは、なきものなり。それを、おもての不同なるにたとへたり。

また、水のうつはものにしたがふにたとふ。水は、きはめて［D］ゆゑに、方円（注）のうつはものにしたがふとて、すみあるにいるれば、すみあり、まろきにいるれば、まろくなれり。（丸い器に）（角のある器に）

（『童子教諺解』による。）

（注）方円＝正方形と円形。

(1) 文章中の A心ノ不同ハ如ごとシ面ノ には返り点が一箇所抜けている。書き下し文を参考にして、適当な位置に**返り点**を書きなさい。

(2) 文章中に B水の器もの とあるが、器ものは容器という意味であるが、水と容器はそれぞれ具体的に何をたとえたものか。それぞれ**五字以内**で書きなさい。

(3) 文章中の C やうなる を現代仮名づかいに改め、**ひらがな**で書きなさい。

(4) 文章中の［D］に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**〜**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア あはれなる
イ きよらかなる
ウ やはらかなる
エ をかしげなる

(5) この文章から読み取れる内容を**四十字以内**で書きなさい。

学力検査 **国語 第三回** 解答用紙

答えは、すべて、この解答用紙に書き、解答用紙だけ提出しなさい。
解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「 」などの記号も文字数に数えること。

一

(1)

(2)

(3)

(4)

10行 9行 8行 7行 6行 5行 4行 3行 2行 1行

二

(1) う

(2) む

(3)

(4)

三

(1) く

(2) く

(3)

(4)

四

(1)

(2)

(3)

五

(1)

(2)

(3) ①

②

(4)

(5)

(6)

働き。

六

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

はじめ

終わり

こと。

七

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

受検番号

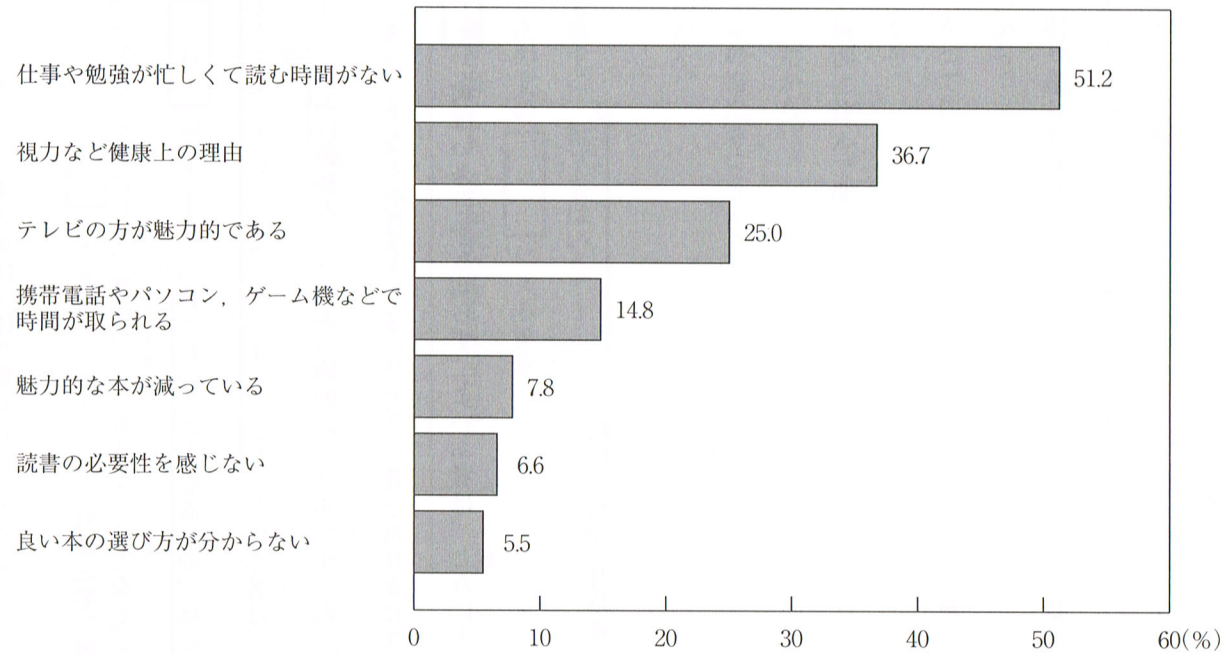
氏名

総得点

国語　学力検査

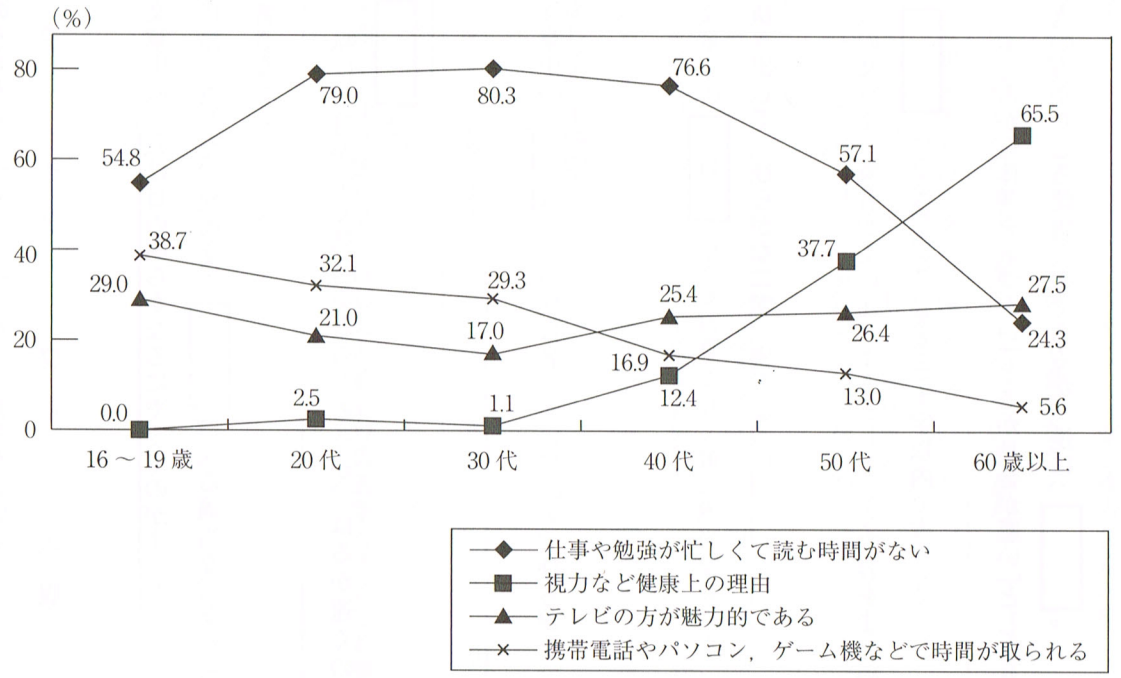
問題用紙

グラフ１　読書量が減った理由（全体）



〔文化庁　平成20年度「国語に関する世論調査」〕
※調査対象：全国16歳以上の男女

グラフ２　読書量が減った理由（年齢別）



〔文化庁　平成20年度「国語に関する世論調査」〕
※調査対象：全国16歳以上の男女

※注意　各ページのすべての問題について、解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「　」などの記号も字数に数えること。

一　放送で聞いたことをもとに、次の(1)～(4)の問いに答えなさい。

(1)　西田さん(生徒)は、自分の読書量が減った理由をどのように考えましたか。最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　放課後は宿題に時間を取られ、夜は勉強に時間を取られるから。
イ　放課後は勉強に時間を取られ、夜は娯楽に時間を取られるから。
ウ　放課後は部活に時間を取られ、夜はテレビに時間を取られるから。
エ　放課後は部活に時間を取られ、夜は勉強に時間を取られるから。

(2)　田島さん(生徒)は、グラフ1とグラフ2からどんなことを読み取りましたか。最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」としている人のほとんどが、四十代から五十代の人であること。
イ　「視力など健康上の理由」としている人のほとんどが、四十代以上の人であること。
ウ　「テレビの方が魅力的である」としている人のほとんどが、十代から二十代の人であること。
エ　「携帯電話やパソコン、ゲーム機などで時間が取られる」としている人のほとんどが、十代から三十代の人であること。

(3)　西田さんが、グラフ1で驚いたのは、何という回答についてですか。資料として示されているグラフから**抜き出して**書きなさい。

(4)　話し合いの最後に、西田さんからテレビについての意見が述べられ、それについて考えておくように司会の指示がありました。あなたは西田さんの意見についてどう考えますか。次の**条件**にしたがい、**注意事項**を守って書きなさい。

(条件)

a　本文は**二段落構成**とし、**八行以上、十行以内**で書くこと。
b　前段では、西田さんの意見を簡潔にまとめること。
c　後段では、あなた自身がテレビを見て体験したことに触れながら、西田さんの意見について考えを書くこと。

(注意事項)

a　氏名や題名は書かないこと。
b　原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。
ただし、〜〜や――などの記号を用いた訂正はしないこと。

二

次の(1)～(4)の――の漢字の読みを、**ひらがな**で書きなさい。

(1) 新しく従業員を雇う。

(2) テニスボールはよく弾む。

(3) 濁流をせき止める。

(4) 抽象的でわかりにくい。

三

次の(1)～(4)の――のカタカナの部分を、**漢字**で書きなさい。

(1) じゃまな木を取りノゾく。

(2) 親しい友人を家にマネく。

(3) 手紙でおじのアンピをたずねる。

(4) ヤゴはトンボのヨウチュウだ。

四

次に示すのは、ある中学生が環境センターにあてて書いたお礼の手紙の下書きです。それを読み、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

拝啓　暦の上では秋になりましたが、皆様におかれましては、お変わりなくお過ごしのことと思います。

さて、先日は環境問題に関する詳しい資料を送ってくれて[a]、ありがとうございました。おかげさまで環境に関する大きな課題を前に一気に視野が開けて、総合的な学習の時間の発表に向けて、滞りがちだった作業がはかどるようになりました。私たちの班では、「温室効果ガスによる影響」について発表することにしました。送ってもらった[b]資料で、家庭から排出される温室効果ガスが増えていることを知り、驚きました。そこで、九月の発表会では、温室効果ガスの排出量の変化やその影響について、異常気象を一例に挙げて説明することにしました。今は夏休み中ですが、班で集まり、発表内容について話し合う時間を設けて、よりよい発表ができるように努力しています。

まだまだ厳しい残暑が続いてはおりますが、皆様、お体を大切になさってください。

平成二十三年八月十日

○○市立○○中学校

三年二組　山田　健一

千葉県環境センター広報室　室長　千葉　太郎　様

(1) ――(a・b)は共通する一単語の敬語に直すことができる。その共通する一単語を、終止形で書きなさい。

(2) 文章中の［A］には「個々の事柄にばかりとらわれていると全体像をつかむことができない」状態を表すことわざが入る。最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　火中の栗を拾う

イ　灯台もと暗し

ウ　闇夜に烏をさがす

エ　木を見て森を見ず

(3) 文章中の［B］に入る、手紙の結びの語として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　敬白　　**イ**　前略　　**ウ**　敬具　　**エ**　草々

五　次の文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

日本語の間という言葉にはいくつかの意味がある。まずひとつは空間的な間である。「すき間」「間取り」というときの間であるが、基本的には物と物のあいだの何もない空間のことだ。絵画で何も描かれていない部分のことを余白というが、これも空間的な間である。

日本の家は本来、床と柱とそれをおおう屋根でできていて、壁というものがない。これは部屋を細かく区分けし、壁で仕切り、そのうえ、鍵のかかる扉で密閉してしまう西洋の家とは異なる。西洋の個人主義はこのような個室で組み立てられた家に住んできたからこそ生まれたというのはよくわかる話である。

それでは、壁や扉で仕切る代わりに日本の家はどうするかというと、障子や襖や戸を立てる。「源氏物語絵巻」などに描かれた王朝時代の宮廷や貴族たちの屋敷を見ると、その室内は板戸や蔀戸、襖や几帳などさまざまな間仕切りの建具で仕切られてはいるものの、いたるところすき間だらけである。西洋の重厚な石や煉瓦や木の壁に比べると、何という軽やかさ、はかなさだろうか。

しかも、このような建具はすべて季節のめぐりとともに入れたりはずしたりできる。冬になれば寒さを防ぐために立て、夏になれば涼を得るためにとりはずす。それだけでなく、住人の必要に応じて、ふだんは座敷、次の間、居間と分けて使っていても、いざ、大勢の客を迎えて祝宴を開くという段になると、すべてをつないで大広間にすることもできる。このように日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在につないだり切ったりして暮らしてきた。

次に時間的な間がある。「間がある」「間を置く」というように、こちらは何もない時間のことである。芝居や音楽では声や音のしない沈黙の時間のことを間という。

バッハにしてもモーツアルトにしても西洋のクラシック音楽は次から次に生まれては消えてゆくさまざまな音によって埋め尽くされている。たとえば、モーツアルトの「交響曲二十五番」などを聞いていると、息を継ぐ暇もなく、ときには息苦しい。モーツアルトは沈黙を恐れ、音楽家である以上、一瞬たりとも音のない時間を許すまいとする衝動に駆られているかのように思える。

それにひきかえ、日本古来の音曲は琴であれ笛であれ鼓であれ、音の絶え間というものがいたるところにあって長閑なものだ。その音の絶え間では松林を吹く風の音がふとよぎることもあれば、谷川のせせらぎが聞こえてくることもあるだろう。ときには、この絶え間があまりにも長すぎて、一曲終わってしまったかと思っていると、やおら次の節がはじまるということも珍しくない。そんなふうに、いくつもの絶え間に断ち切られていても日本の音曲は成り立ってしまう。

空間的、時間的な間のほかにも、人やものごととのあいだにとる心理的な間というものもある。誰でも自分以外の人とのあいだに、たとえ相手が夫婦や家族や友人であっても長短さまざまな心理的な距離、間をとって暮らしている。このような［　C　］があってはじめて日々の暮らしを円滑に運ぶことができる。

こうして日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。それを上手に使えば「間に合う」「間がいい」ということになり、逆に使い方を誤れば「間違い」、間に締まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け」になってしまう。間の使い方はこの国のもっとも基本的な掟であって、日本文化はまさに間の文化ということができるだろう。

では、この間は日本人の生活や文化の中でどのような働きをしているのだろうか。そのもっとも重要な働きは異質なもの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させること、つまり、和を実現させることである。早い話、互いに意見の異なる二人を狭い部屋に押しこめておけば喧嘩になるだろう。しかし、二人のあいだに十分な間をとってやれば、互いに共存できるはずだ。狭い通路に一度に大勢の人々が殺到すれば、たちまち身動きがとれなくなってパニックに陥ってしまうが、一人ずつ間遠に通してやれば何の問題も起こらない。

和とは異質のもの同士が調和し、共存することだった。この和が誕生するためになくてはならない土台が間なのである。和はこの間があってはじめて成り立つということになる。

（長谷川櫂『和の思想』による。）

（注1）源氏物語絵巻＝「源氏物語」の興味深い部分を絵画化した巻物。
（注2）蔀戸＝平安時代の貴族の住宅などで使われた日光や風雨を防ぐための建具。格子を取り付けた板戸。
（注3）几帳＝平安時代の貴族の住宅などで使われた間仕切りや目隠しに使う建具。台に二本の柱を立てて横木を渡し、そこから幕をかけおろしたもの。
（注4）次の間＝主な部屋に隣接する小部屋。控えの間。
（注5）やおら＝ものごとの起こり方がゆっくりであるさま。おもむろに。
（注6）間遠＝時間・距離の間隔が離れているさま。

(1) 文章中の～～（a・b・c・d）の四つの動詞のうち、一つだけ**活用の種類の異なるもの**がある。その符号を書きなさい。

(2) 文章中に「このように日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在につないだり切ったりして暮らしてきた」とあるが、筆者の考えによると「日本人が家の中の空間を自由自在につないだり切ったりできる」のはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　西洋では外敵の侵入を防ぐために、家の中でも防壁が必要になるが、日本は島国で外敵を恐れる必要がないから。
イ　西洋人は何もない空間を恐れるが、日本人は、むしろ花も木もない石庭のような何もない空間を好むから。
ウ　壁や扉で仕切られている西洋の家と違い、日本の家は入れたりはずしたりできる建具で仕切られているから。
エ　個人主義の西洋では、家族の中でもプライベートな空間を堅持するが、日本人は家族の和を優先するから。

(3) 文章中に「時間的な間とあるが、これについて西洋と日本の違いを音楽の例で説明した次の文の［　①　］・［　②　］に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**それぞれ書きなさい。ただし、［　①　］は**六字**、［　②　］は**五字**で抜き出すこと。

西洋の音楽は、沈黙を恐れ［　①　］を許さない。これに対して、日本の音楽は［　②　］が曲中いたる所にあり、それによって寸断されていても、音曲は成り立つのである。

(4) 文章中の［　C　］に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して、五字**で書きなさい。

(5) 文章中に D 日本文化はまさに間の文化ということができるだろうとあるが、「日本文化」が「間の文化」と言えるのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 日本人は、様々な場面で「間」を上手に使っているから。
イ 日本人は、西洋にないものを求め、「間」を発見したから。
ウ 日本には、「間」に関係する多くのことばが存在するから。
エ 日本には、「間」の使い方を制限する、掟が存在したから。

(6) 文章中に E 和はこの間があってはじめて成り立つ とあるが、このように言えるのは、間が日本人の生活や文化の中でどのような働きをするからか。その働きを、「……働き。」につながる形にして、文章中の言葉を使って、**三十字以内**で書きなさい。

六 次の文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

〔わたしは東京での仕事を終え、明け方、車で横浜に戻り、横浜博覧会の跡地に建設中の、卵形のコンベンションホール(注1)を見ていた。〕

――ああ，帰ってきたな。

まだ、卵の先っぽのところは鉄筋の骨組みをあらわにしている白い建てものを見たとき、わたしは胸の中でちょっとホッとしながらそう呟いて背中をシートに委ねた。そうしてその一瞬のあとに、A「帰ってきた」と感じた自分に驚いているのだった。

わたしはひとつの場所に四年以上暮らしていたことがない。

小さなころからの記憶は、不定期な間隔をおいて何度も経験してきた引っ越しによって区切られていると言っても過言ではない。わたしにとって最初の引っ越しはおそらく三歳か四歳のときで、それに関してはおぼろげな記憶があるだけだ。ただはじめて引っ越しそのものに嫌悪を抱いたのは、十五歳の冬だった。その引っ越しは、わたしがはじめて東京以外のところへ移り住むためのものだった。

家は、人が住むのを止めるつもりでいることを敏感に察知するものだと知ったのはそのときだと思う。家に拒まれている自分を感じたのも、そのときがはじめてだ。じゅうたんが敷いてあっても畳が敷いてあっても、床は「裏切った」人間がその上を歩くのを嫌がっているように冷たくなるのだった。人の住まない家は荒れるとよく言われるが、家は荒れる前にその体温を下げるのである。

運び出しやすいように部屋の中央へ引きずり出されたさまざまの家具は、そうなってみると急に背が高くなった。洋服だんすが山を作り本棚は尾根になり、その谷間に突っ立った十五歳のわたしは、ほんとうに泣き出したいような気持ちになってきた。B靴下をはいた足の裏がチクチク痛く感じられるほどに冷たかったからである。

日常の中ではあるべきところにあるべき姿で佇み、殊更注意を促すこともなく優しくわたしの周囲にいたそれぞれの家具は、中身を吐き出し引きずり動かされてみるといきなり嵩(注2)を増してモンスターのように見えた。それだけでもわたしを怖がらせるには充分だった。そこには、不自然な形で剝ぎ取られた日常の欠片があった。

そんな思いは足の裏から侵入してくる［　C　］と変に重なり、わたしはちょっと気を許せばガラガラと均衡を崩しそうな危うい気持ちのまま、黙々とこわれものを新聞紙でくるみ、いっぱいになった段ボール箱にビッと音を立てながらガムテープでふたをしていた。D これで最後になるといい。引っ越しの作業の途中にそう思ったのも、それがはじめてだったろうと思う。

――お茶を飲もうよ。

そのとき姉が言った。

それは、そのときのわたしがいちばん必要としていたことばだったような気がした。

――あ、そうしよう。

わたしは切実なまでの声でそう答えて、台所に立ってお湯を沸かした。だから、E十五歳のときにわたしがはじめて知ったことの中にはもうひとつ大切なことがあって、それは「お茶を飲む」という行為の威力なのである。

そのあとも、やはりわたしの引っ越しは続いた。

服をビニール袋で包む。大切にしている陶器はタオルにくるむ。繰り返されるそういった動作の度に、けれどわたしは「ああ、ほんとうにこれで最後にしたい」と胸の中に念じていた。

F 横浜博跡地のコンベンションホールを見て「帰ってきた」と感じた自分にわたしが自分で驚いたのは、横浜駅近くに住むようになってまだ四か月も経たないからである。そこをわたしは自分の中で「家」とは呼んでいない。そうしてそう考えてみれば、もうずいぶん長いこと「家」を感じるところには住んでいないような気もする。

それでも、どこに住んでいたころでもその近くに何か目印になるようなもの――ガソリンスタンドの光とか、信販会社(注3)の派手な看板広告とか、レストランのネオンサインとか、そういったものを見たときやはりわたしは、帰ってきたな、と感じていたのかも知れない。

人というものはずいぶん短い時間のうちに、住みついた町に吸収されてしまうものだなあ、と考えた。帰ってきた、と感じた自分が、妙に都合の良いように思えたのだった。

（鷺沢萠『最後の引っ越し』による。）

（注1） コンベンションホール＝会議や催しを行うための建物。
（注2） 嵩＝ものの体積や容積。
（注3） 信販会社＝消費者が買い物をするお金を貸し付ける民間の金融機関。

(1) 文章中に「帰ってきた」と感じた自分に驚いている[A] とあるが、なぜわたしは驚いたのか。その理由として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 引っ越しを繰り返している自分には帰ってくる家はあるはずがないから。

イ かつて住んだ家にも帰るのを拒まれているように感じてばかりいたから。

ウ 横浜に住んで間もなく、かつて自分のものと感じられた家もなかったから。

エ 家の冷たさにうんざりして、家に帰りたいと思った経験がなかったから。

(2) 文章中に 靴下(くつした)[B]をはいた……冷たかった とあるが、その理由を述べた次の文の［　　］に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**、**十五字**で書きなさい。

> 家は、人が住むのを止めるつもりでいることを敏感に察知する。じゅうたんが敷いてあっても畳が敷いてあっても、床は［　　］のを嫌がっているように冷たくなる。家は荒れる前にその体温を下げるものだからだ。

(3) 文章中の［C］に入る適当な言葉を**ひらがな三字**で書きなさい。

(4) 文章中に これで最後になるといい[D] とあるが、わたしがこのように思ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 引っ越しそのものに嫌悪を抱いていたから。

イ 以前何度も引っ越しを繰り返していたから。

ウ 引っ越す時は家具まで自分を威圧するから。

エ なじんだ家をはなれるのがつらくなるから。

(5) 文章中の 十五歳のときにわたしがはじめて知ったこと[E] を二つにまとめるとすると、一つは「お茶を飲む」と、いらだつ心が和むことである。もう一つは何か。「……こと。」につながる形で文章中から**抜き出して**、**十四字**で書きなさい。

(6) 文章中に 横浜博跡地のコンベンションホール[F]を見て「帰ってきた」と感じた とあるが、それは具体的に何を見たときか。文章中から**三十四字で抜き出して**、**はじめと終わりの五字**をそれぞれ書きなさい。

七

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

「我こそすこやかにして、遠里行くとも疲るることなし。」といふ者は、多く［A］に病を生ず。「我は目の明らかなるにや、はるかなるもの、かすかなるものといへども、のがすことなし。」といふ者は、必ず目に病を生ず。「けふは頭痛み、きのふは胸のあたりふたがりぬ。」と、日ごと(毎日)にいふ者は、大なる病得ることまれなり。「若き折りより薬飲みしこと［D］。病はいささかも知らず。」といふ者は、とみに(急に)大なる病を得る。

遠里行くとも疲るることなし(遠方の里まで歩いていったとしても)[B]　ふたがりぬ(つまった)[C]

（松平定信『花月草紙』による。）

(1) 文章中の［A］に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 手　**イ** 足　**ウ** 首　**エ** 腹

(2) 文章中の 我は目の明らかなるにや……のがすことなし[B] の意味を現代語に直した、次の文の［　　］に入る適当な言葉を**三十字以内**で書きなさい。

> 私は、目がよく見えるからだろうか、はるか遠くのものや［　　］ない。

(3) 文章中の けふは[C] を現代仮名づかいに改め、**ひらがな**で書きなさい。

(4) 文章中の［D］に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**、**ひらがな二字**で書きなさい。

(5) この文章で、筆者が主に述べようとしている内容をまとめた次の文の［　　］に入る適当な言葉を**三十字以内**で書きなさい。

> ふだんから体調を気づかい「どこか具合が悪い」としきりに言う人の方がむしろ健康なのであるが、逆に、［　　］。

学力検査 **国語 第四回** 解答用紙

答えは、すべて、この解答用紙に書き、解答用紙だけ提出しなさい。
解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「 」などの記号も文字数に数えること。

一

(1) 20 10 25

(2) 分の一

(3)

(4) 20 10 30 40

(5)

二

(1) (る)

(2) (る)

(3)

(4)

三

(1) (しい)

(2) (る)

(3)

(4)

四

(1) ① ②

(2) ① ②

五

(1)

(2) から。

(3)

(4) 10 20 30

(5) ① ②

六

(1) はじめ 終わり

(2) はじめ 終わり

(3) ①

(4)

(5) 1行 2行 3行 4行 5行 6行 7行 8行 9行 10行

七

(1)

(2)

(3)

(4) 10 20

(5) 10 20 30 40

受検番号

氏名

総得点

※注意　各ページのすべての問題について、解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「 」などの記号も字数に数えること。

―　放送で聞いただけでもよいが、次の(1)～(5)の問いに答えなさい。

(1) 地表の温度を上げていると主なものは何ですか。**二十五字以内**で書きなさい。

(2) 太陽から出る熱のうち、地球が受け取っているのは、太陽が出している熱のうちの何分の一ですか。**漢数字**で書きなさい。

(3) 地球の表面から熱が逃げていっていることを説明するために、筆者は地球を何にたとえて説明していますか。**一単語**で書きなさい。

(4) 地球上の空気の中の水蒸気や二酸化炭素はどんな役割をしていますか。**四十字以内**で書きなさい。

(5) 地球に二酸化炭素がないとどうなりますか。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　植物の光合成が不必要になり、植物が地球上でより快適に生きていけるようになる。

イ　窒素や酸素を生み出すことができなくなり、わたしたちが地球上で生きていけなくなる。

ウ　地球の温度が現在よりずっと上がってしまい、わたしたちが地球上で生きていけなくなる。

エ　地球の温度が現在よりずっと下がってしまい、わたしたちが地球上で生きていけなくなる。

二

次の(1)～(4)の――の漢字の読みを、**ひらがな**で書きなさい。

(1) 出発の時間が迫る。

(2) 切手の収集に凝る。

(3) 資金は潤沢にある。

(4) 多くの聴衆が集まる。

三

次の(1)～(4)の――のカタカナの部分を、**漢字**で書きなさい。

(1) 彼女は心のヤサしい人だ。

(2) 彼は五カ国語をアヤツるらしい。

(3) 秋田までのオウフク切符を買う。

(4) 荷物を倉庫にホカンする。

四

次の文章はある中学生が生徒会長に立候補する友人を応援するスピーチです。これを読み、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

> このたび、生徒会長に立候補した広瀬太郎君は、まじめな人柄で友人たちから厚い信頼を得ています。顧問の先生に聞いた[A]ところ、彼は一年生で副会長を務めていたときも、「みんなで力を合わせて、活気あふれる生徒会を創造していきたい。」[B]と話していたそうです。当選したあかつきには、全校生徒のために、[C]ことなく働いてくれるでしょう。
>
> 広瀬太郎君に、みなさんの清き一票をお願いします。

(1) 文章中の[A]聞いた を適切な敬語に直す場合、

① その敬語の種類を、次の**ア**～**ウ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 尊敬語　　**イ** 謙譲語　　**ウ** 丁寧語

② その敬語と同じ種類の敬語を、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア いらっしゃる　　**イ** ございます

ウ 召し上がる　　**エ** いただく

(2) 文章中の[B]みんなで力を合わせて、活気あふれる生徒会を創造していきたい。 を意味を変えずに二つの文に分けて次のように書く場合、[①]・[②]に入る言葉をそれぞれ書きなさい。ただし、[②]はあとの**語群**から選ぶこと。

> 私の[①]することは活気あふれる生徒会の創造です。
> [②]、みんなで力を合わせましょう。

②の語群

なぜなら・そのために・むしろ・しかも・けれども

(3) 文章中の[C]に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 労を惜しむ

イ 水に流す

ウ 肩を持つ

エ 肝に銘じる

五 次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

待望の映画が封切られたという事実と、観客が大勢押し寄せて会場が込みあったという事実、という二つの事柄をことばで表現することにしよう。まず、そっけなく述べ[a]れば、「待望の映画がついに封切られた。連日大勢の観客が押し[b]寄せ、会場は混雑をきわ[c]めている」となる。が、これでは単なる事実の報道にすぎ[d]ず、わざわざ表現する意図がもう一つ明確でない。

そこで、ふつうは、「待望の映画がついに封切られた。そのため、連日大勢の観客が押し寄せ、会場は混雑をきわめている」というふうに、二つの文を関係づけて展開する。A この流れはきわめて自然だ。ところが、それと同時に、「待望の映画がついに封切られた。だが、大勢の観客が押し寄せ、会場は混雑をきわめている」という逆方向への展開もごく自然なのだ。

まったく同じ二つの文を、順接と逆接という正反対の接続詞で結ぶことが、どちらも可能であることがわかる。ただ、どう関係づけるかによって、全体としての意味合い、すなわち表現意図は違う。前者は、長い間待ちこがれた映画なので当然みんなが押し寄せて連日満員になっているという順当な結果の表現だ。それに対し後者は、封切りによってようやくファンの期待に応えられたというプラスの要素を認めたうえで、それだけに当然、連日大勢の人が押し寄せてごった返し、会場はひどい混雑ぶりだ、というマイナス面を添えている。

つまり、前者は、事実の報道と、その事実から論理的に当然起こった結果とを冷静に述べた表現であるのに対し、後者の表現からは、だから自分は今すぐに会場へ足を運ぶ気はないとか、だから皆さんも、少し騒ぎが落ち着くのを待って、ゆっくり見に行くことをすすめるとかといったなんらかの(注1)ニュアンスが感じられる。

それでは、後半を打消(うちけし)の表現にしたら、どういう解釈になるだろう。「待望の映画がついに封切られた」のあとを「大勢の観客が押し寄せて会場が混雑をきわめるようなことはない」と変えてみよう。すると今度は、情報の流れが逆になる。先行文に「待望の」とある以上、後続する否定文の情報は論理的に自然な展開にはならないからだ。それはむしろ逆接というべき関係になるはずだ。具体的には「待望の映画がついに封切られた。しかし、大勢の観客が押し寄せて会場が混雑をきわめるようなことはない」といった流れになるだろう。

このとき、当然、それはなぜかという疑問が浮かぶ。たとえば、封切りの情報が今のところ一部にとどまり、まだ世の中に広く流れていない、といった潜在情報が奥に隠されているかもしれない。また、そういう事実の報道にとどまらず、すわってゆっくり見られるから、ぜひ見に行くことをすすめるとか、まだ世間に広く知られていない今のうちが見に行くチャンスだとかといった、なんらかの [B] の意図が含まれていると解釈することもできるだろう。

そういう自然な流れに逆らって、もしも「しかし」といった逆接の代わりに「だから」という順接の接続詞で結んだらどうなるのだろう。C 一見無理な流れだが、読者はそれでもなんとか理解しようとする。たとえば、見られないと思うとよけいに見たくなりボルテージ(注2)が上がるのが人情だ。それが解禁になっていよいよ封切られると知って最高潮に達したが、いざ実際に封切られてしまうと、いつでも見られると思い、少し熱が冷めてしまったのだろう、というふうな解釈で全体の筋を通すかもしれない。

ことばの形で表現された部分の言語的な意味がわかっても、それでコミュニケーションが成り立つわけではない。「ああ、そう、それで?」とか「それがどうした」とかという気持ちが残る間は、まだ話が通じたとはいえない。ことばの奥にあるはずの相手の表現意図のところまできちんととらえきれたときに、はじめて理解が成立するのである。表現上のつじつまが合っても、その表現意図にそぐわなければ、D コミュニケーションにおいては「誤解」というレッテルがはられる。

(中村明『日本語のコツ』による。)

(注1) ニュアンス＝意味・感情などの微妙な違い。

(注2) ボルテージ＝熱意。意気込み。

(1) 文章中の〰(a・b・c・d)の四つの動詞のうち、一つだけ**活用の種類の異なるもの**がある。その符号を書きなさい。

(2) 文章中に A この流れはきわめて自然だ とあるが、なぜ自然だといえるのか。その理由として最も適切な部分を、「…から。」につながる形で文章中から**抜き出して、九字**で書きなさい。

(3) 文章中の [B] に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 命令　**イ** 依頼　**ウ** 勧誘　**エ** 確認

(4) 文章中に C 一見無理な流れ とあるが、なぜか。その理由を「逆接」という語を用いて**三十字以内**で書きなさい。

(5) 文章中に D コミュニケーションにおいては「誤解」というレッテルがはられる とあるが、話し手として何かを表現する場合、誤解を生じないためにどうすればよいかを説明した次の文の [①] には**五字以内**、[②] には**七字**で、それぞれに入る適当な言葉を書きなさい。ただし、[②] は文章中から**抜き出す**こと。

> [①] まで相手が [②] られるように表現を選んで話す。

六

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

〔「私」が十一歳の夏休みに父親からスイス製の万年筆をもらい、大人になったような気分で日々を過ごす場面である。〕

私はいつどんな時も、書きたくて書きたくてたまらなくなった。国語の漢字練習帳がいるからと母に嘘をつき、お金をもらって大学ノートを買った。A学校から帰るとランドセルを置き、真っすぐ机の前に向かってとにかく万年筆のキャップを外した。

いざとなって、自分が何を書くつもりなのか、ちっとも考えていないことに気づいたが、私はひるまなかった。そんなことは大した問題とは思えなかった。インクがしみ出してくる瞬間や、紙とペン先がこすれ合う音や、罫線(注1)の間を埋めてゆく文字の連なりの方が、ずっと大事なのだった。

大人たちはすぐに、娘が何やら夢中になって書いていると気づいたが、必要以上に干渉はしなかった。とにかく机の前で書き物をしているのだから、それは勉学、例えば漢字の書き取りのようなものに違いないと思い込んだらしい。

スリッパをはいて階段を登ってはいけないとか、お風呂に入った後は冷たいものを飲んではいけないとか、あの頃課せられていた多くの禁止事項の中に〝書き物〟が加えられなかった代わりに、大人たちは誰も書かれた内容については興味を示さなかった。どうせ自分たちの知っている漢字ばかりなんだから、という訳だ。

私はまず手始めに、自分の好きな本の一節を書き写してみた。『ファーブル昆虫記』のフンコロガシの章。『太陽の戦士』の出だしのところ。『アンデルセン童話集』から『ヒナギク』と『赤いくつ』。アン・シャーリーが朗読する詩。『恐竜図鑑』のプテラノドンの項。『世界のお菓子』、トライフルとマカロンの作り方。……

想像したよりずっとわくわくする作業だった。

そしてふと気がついて手を休めると、ノート一面びっしり文字で埋め尽くされていた。

B〝書き物〟に対する態度が、他の大人と唯一違っていたのがキリコさん(注2)だった。干渉しない点については同じだが、彼女は明らかにこの作業を、勉学とは違う種類のものとして認めていた。敬意さえ払っていたと言ってもいい。

子ども部屋やダイニングテーブルで作業に熱中している私を見つけると、一瞬キリコさんは立ち止まり、姿勢をただし、邪魔しないように注意を払いながら通り過ぎた。あるいはおやつを運んでくる時は、不用意にノートの中身に目をやって盗み見をしていると誤解されないよう、気をつかっているのが分かった。自分の手元に視線を落とし、一切声は掛けず、ノートからできるだけ遠いところにジュースを置いた。コップに付いた水滴で、ページが濡れてはいけないと思ったからだろう。

やがて私は他人の文章を書き写すだけでは満足できなくなり、作文とも日記ともお話ともつかないものを書き付けるようになった。クラスメイト全員の人物評と先生の悪口、一週間の食事メニュー、百万円あったら買いたい品物のリスト、テレビ漫画の予想ストーリー、自分の生いたち、無人島への架空の旅行記。とにかく、ありとあらゆるものだった。

今日は何にも書くことがないという日は、一日もなかった。キャップさえ外せば、万年筆はいつでも忠実に働いた。

Cだから初めてインクが切れた時は、うろたえた。

「どうしよう、万年筆が壊れちゃった」

私は叫び声を上げた。

「もう壊しちゃったの？せっかくのパパのお土産なのに。新しいのは買いませんからね。壊したあなたが悪いんです」

新しいのは買いませんからね――これが母の口癖であり、得意の台詞だった。私は自分の不注意を呪い、絶望して泣いた。

「大丈夫。インクが切れただけなんだから、補充すれば元通りよ」

救ってくれたのは、やはりキリコさんだった。

「スイスのインクなのよ。パパがまたスイスへ行くまで待たなきゃならないの？」

「いいえ。街の文房具屋さんへ行けば、必ず売っています」

必ずという言葉を強調するように、キリコさんは大きくうなずいた。キリコさんは正しかった。私は万年筆を壊してなどいなかった。約束どおり彼女は新しいインクを買ってきて、補充してくれた。ケースの裏に書いてある説明書は外国語だったから、二人とも読めなかったけれど、彼女は慎重に方向を見定め、崇高な(注3)儀式の仕上げをするように、万年筆の奥にインクを押し込めた。

「ほらね」

それがよみがえったのを確かめると、キリコさんは得意そうに唇をなめた。

（小川洋子『キリコさんの失敗』による。）

（注1）罫線＝紙や書類に枠や書き込みのための目安として引いた線。
（注2）キリコさん＝「私」の家の若いお手伝い。
（注3）崇高な＝気高く尊い。

(1) 文章中に A学校から帰ると……キャップを外した とあるが、書くことで味わえる、どのようなところに「私」は夢中になったのか。それを述べた部分を、文章中から**四十五字で抜き出して、はじめと終わりの五字**をそれぞれ書きなさい。

(2) 文章中に B〝書き物〟に対する……キリコさんだった とあるが、「他の大人」の態度を述べた部分を、文章中から**二十一字で抜き出して、はじめと終わりの五字**をそれぞれ書きなさい。

(3) 文章中に Cだから初めてインクが切れた時は、うろたえた とあるが、私はなぜうろたえたのか。その理由を説明した次の文の［①］・［②］に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**それぞれ書きなさい。ただし、［①］は**十字**、［②］は**二字**で抜き出すこと。

［①］万年筆が壊れたと誤解し、［②］という熱中できるものを失ったと思い込んだから。

(4) 「私」にとっての「キリコさん」とは、どのような存在か。その説明として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 「私」に引け目を感じて日ごろは遠慮がちにふるまっているが、大事な時には勇気をふるい、力になってくれる心強い存在。

イ 「私」をいつも注意深く観察してすきのない接し方をすると同時に、どんな事でも冷静に処理していく近寄りがたい存在。

ウ 「私」を子ども扱いしないで温かく見守りつつ、困ったときには手をさしのべて解決に導いてくれる頼もしい存在。

エ 「私」をわざと突き放すことによって自立を促し、苦しみを一人で乗り越えるのをじっと待ち続ける我慢強い存在。

(5) この文章を読んで、あなたは「私」と「キリコさん」の間柄についてどう考えますか。次の**条件**にしたがい、**注意事項**を守って書きなさい。

（条件）

① 本文は**二段落構成**とし、**八行以上**、**十行以内**で書くこと。

② 前段では、文章中で語られる二人の間柄について簡潔にまとめること。

③ 後段では、文章中の二人の間柄に対するあなたの感想とその理由を書くこと。

（注意事項）

① 氏名や題名は書かないこと。

② 原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。

ただし、〜〜や――などの記号を用いた訂正はしないこと。

七

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

呂蒙正（注1）、人の過ちを記するを喜ばず。初めて参知政事（注2）として朝堂に入りしとき、朝士（注3）あり、簾内においてこれを指して曰はく、「A この小子も また参政か。」と。蒙正 B 伴りて聞かざるまねしてこれを過ぐ。その同列（注4）怒りて、その官位姓名をなじらしむ（問いただそうとした）。蒙正遽かにこれを止む。朝を罷め（退出して）、同列なほ平らかなることあたはずして、C 悔不窮問。蒙正曰はく、「もし一たびその姓名を知らば、すなはち終身また忘るることあたはざらん。D まことに知ることなきにしかざるなり。かつ、これを問はざるもなにをか損ぜん。」と。ときにみな E その量に服せり。

（『宋名臣言行録』による。）

（注1） 呂蒙正＝宋代の人物。

（注2） 参知政事＝宰相を助け政治を行う者。執政。

（注3） 朝士＝宮廷の役人。

（注4） 同列＝蒙正の同僚。

(1) 文章中の A この小子 が指している人物として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 朝士　**イ** 呂蒙正　**ウ** 同列　**エ** 過ちを犯した人

(2) 文章中の B 伴りて を現代仮名づかいに改め、**すべてひらがな**で書きなさい。

(3) 文章中の C 悔不窮問 は、どのように訓読するか。「悔レ不二窮一問一」をもとに、**すべてひらがな**で書きなさい。

(4) 文章中に D 忘るることあたはざらん とあるが、具体的に何を忘れることができないと蒙正は言っているのか。**二十字以内**で書きなさい。

(5) 文章中の E その量に服せり は、「その度量の広さに敬服した」という意味であるが、蒙正の人柄のどのようなところに人々は敬服したのか。**四十字以内**で書きなさい。

学力検査 **国語 第五回** 解答用紙

答えは、すべて、この解答用紙に書き、解答用紙だけ提出しなさい。
解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「 」などの記号も文字数に数えること。

一

(1) 20 25 10

(2) から

(3)

(4)

(5) 20 40 30 50 10

二

(1) (す)

(2) (く)

(3)

(4)

三

(1) (す)

(2) (く)

(3)

(4)

四

(1) ①

②

(2)

五

(1) 20 30 10

(2)

(3) ①

②

(4) はじめ

終わり

(5) ①

②

六

(1)

(2)

(3) ①

②

(4)

(5) 1行 2行 3行 4行 5行 6行 7行 8行 9行 10行

七

(1)

(2)

(3) 20 10

(4)

(5) 20 40 30 10

受検番号

氏名

総得点

学力検査

国語

問題用紙

くらし

石垣（いしがき）りん

食わずには生きてゆけない。
メシを
野菜を
肉を
空気を
光を
水を
親を
きょうだいを
師を
金もこころも
食わずには生きてこれなかった。
ふくれた腹をかかえ
口をぬぐえば

台所に散らばっている
にんじんのしっぽ
鳥の骨
父のはらわた
四十の日暮れ
私の目にはじめてあふれる獣の涙。

※注意　各ページのすべての問題について、解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「　」などの記号も字数に数えること。

一　放送で聞いたことをもとに、次の(1)～(5)の問いに答えなさい。

(1)　小山さん(生徒)は、この詩にはどんなことが書かれていると思いましたか。**二十五字以内**で書きなさい。

(2)　小山さんは、作者が「食べてきたもの」は、詩の何行目から何行目に書かれていると思いましたか。

(3)　小山さんは、詩の中の「食う」という言葉をどんな意味に取るべきなのではないかと感じましたか。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　自分が生きるために必要とする意味。
イ　自分が生きるために犠牲にするという意味。
ウ　人間が避けては通れない行為だという意味。
エ　人間が延命のために必要とするという意味。

(4)　小山さんは、「ぺくれた腹をかかえ」の部分には、作者のどんな思いが表れていると思いましたか。**七字**で書きなさい。

(5)　小山さんは、詩の最後の部分の「四十の日暮れ／私の目にはじめてあふれる獣の涙。」には、作者のどんな気持ちが表れていると思いましたか。**五十字以内**で書きなさい。

二 次の(1)～(4)の――の漢字の読みを、**ひらがな**で書きなさい。

(1) 品物を問屋に卸す。

(2) 優勝の栄冠に輝く。

(3) 新党の綱領が発表される。

(4) 土地の一部を売却する。

三 次の(1)～(4)の――のカタカナの部分を、**漢字**で書きなさい。

(1) 窓辺に机をウツす。

(2) 頭痛によくキく薬。

(3) テツボウにぶら下がる。

(4) ピアノのエンソウ会を開く。

四 千葉さんの学級では、国語の時間に一分間スピーチをすることになりました。次に示すのは、そのスピーチについての話し合いです。それを読み、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

相談者　私の悩みは、みんなの前で話すとき声が小さくなることです。教室の後ろの席の人が身を乗り出すしぐさをするのでわかります。

回答者　これは、以前、先生が言ったA ことですが、僕は、みんなの前で話すとき、［B］よう心がけています。そうすれば、顔が上がって、声が通りやすくなるでしょう。

相談者　僕は、話の順序を間違えたり、早口になったりします。後で「よくわからなかった、もう一度話して」などと言われます。

回答者　C 私がスピーチをするときに工夫していることは、話の順序を間違えないためには、事前に内容をまとめたメモをつくるようにして、早口にならないためには、適度に間を取るなど、意識してゆっくり話すようにしています。

(1) 文章中の A 言った を適切な敬語に直す場合、

① その敬語の種類を、次の**ア**～**ウ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 尊敬語　　**イ** 謙譲語　　**ウ** 丁寧語

② その敬語と同じ種類の敬語を、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア いらっしゃる　　**イ** 申し上げる

ウ ございます　　**エ** うかがう

(2) 文章中の［B］に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 聞き手に伝わるようなわかりやすい言葉を選んで、話しかける

イ 意味がわかるように、一語ずつゆっくり発音して、話しかける

ウ 後ろから二番目の席に座っている人たちに向かって話しかける

エ 運動会で選手たちを応援するときのような大きな声で話しかける

(3) 文章中の C 私がスピーチを……しています。 を意味を変えずに三つの文に分けて次のように書く場合、［①］・［②］に入る言葉をそれぞれ書きなさい。ただし、［②］はあとの**語群**から選ぶこと。

私がスピーチをするときに工夫していることを話します。［①］、話の順序を間違えないためには、事前に内容をまとめたメモをつくるようにしています。［②］早口にならないためには、適度に間を取るなど、意識してゆっくり話すようにしています。

②の語群

むしろ・なぜなら・しかも・それから・けれども

五

次の文章を読み、あとの(1)〜(5)の問いに答えなさい。

〔写真家である祖父に、孫の「僕」と、友人のキーチ、良次の三人が、高校卒業の記念写真を、一人ずつ撮ってもらっている場面である。〕

「オーケー。ハイ、撮りまあす。一、二、三」

祖父はシャッターを切った。

「いい顔だったぜ。おめえはおやじよりか、兄貴たちの誰よりか色男だ。さて、次が問題――」

学生服を着、詰襟のホックを留める。三人で着回せるほど、僕らの体型は同じくらいだった。

椅子に腰を下ろして、僕はキーチと良次に目配せをした。悪いな、これで終わりだから、という意味だ。友人たちは文句も言わずに付き合っていてくれた。

祖父の体に写真を撮る力など残っていないことを、僕は良く知っていた。暮れには僕の出願用の写真を撮ると言って譲らず、ひどいピンボケの肖像を撮った。大学に提出したものは、こっそり父が撮り直したプリントだった。

A やはりそのときと同じように、正気を信じて疑わぬ祖父が悲しかった。

「ハイ、こっち向いて。鳩ポッポが出るよ」

B まっすぐにレンズを見ることができなかった。僕は祖父に促されてもしばらくの間、中腰に構えた祖父の足元を見ていた。祖父は震える膝を、節立った両掌でかろうじて支えていた。

「ポッ、ポッ、ポッ……ほらほら、こっち向いて。ポッ、ポッ、ポッ……」

C もういいよ、おじいちゃん、と僕は胸の中で呟いた。

D 僕はこの世に生まれ落ちてから十八年間の克明な自分自身の記録を持っている、幸福な子供だった。それがどれくらい幸福なことか、そのとき初めて知った。

アルバムの最初の一枚は、鯉のぼりを広げたスタジオの中央に、素裸の赤ん坊が大の字に寝ている写真だった。

幼稚園のジャングルジムのてっぺんで万歳をしている写真。七五三のおすまし顔は山王様の境内で撮ったものだ。祖母の骨箱を抱いてべそをかいている写真。小学校の校門で気を付けをしている晴れ姿。運動会や遠足のスナップ。自転車の練習。真新しい野球のユニホームを着て、バットを構えている一枚。三角帽子をかぶったクリスマスの夜。最後のまともな一枚は、新調したスーツを着て、リーゼント(注1)に櫛を入れている。

もういいよ、おじいちゃん、と僕は胸の中で何度も呟いた。

おじいちゃんに教えられた通り、僕は一生嘘はつかない。身の丈以上の見栄は張らない。口がさけても、愚痴は言わないから。

世界が赤や青や黄色の色で塗られているなんて、信じないから。世の中の風景や人物は、みんな光と影のモノクロなんだって、僕はちゃんと知っているから。

動いているということは千分の一秒ずつ止まっていることの連続なんだろ。だから人間は、一瞬をないがしろにしちゃいけない。千分の一秒の自分をくり返しながら生きて行くんだ。おじいちゃんに教えられたそんな難しいことも、僕はもうちゃんとわかったから。

E もういいよ、おじいちゃん。

――祖父は長いことファインダー(注2)を覗いてから、何の注文もつけずにいきなりシャッターを切った。

「あれ。いいのかよ」

「オーケー。ごくろうさん」

「オーケーって、俺だけいいかげんじゃねえのか?」

祖父は腰を伸ばしながら、じっと僕を見つめた。

F 「おめえには、もう何も言うことはねえよ」

この人は伊能夢影という名の、日本一の、いや世界一のカメラマンなのだと僕は思った。

十八年間、僕の成長の記録を克明に撮り続けた祖父は、とうとう僕の心の中までを撮りおえてしまったのだった。

「もうこれでいい。いい写真が撮れた」

ぽつりと言い残して、祖父はライカ(注3)を三脚からはずした。

(浅田次郎『霞町物語』による。)

(注1) リーゼント=髪型の一つ。
(注2) ファインダー=カメラののぞき窓。
(注3) ライカ=ドイツのライツ社製のカメラ。

(1) 文章中に A そのとき とあるが、それはだれがどんなことをしたときか。**三十字以内**で書きなさい。

(2) 文章中に B まっすぐにレンズを見ることができなかった とあるが、「僕」がそうできなかったのはなぜか。最も適当なものを、次の**ア**〜**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 自分を正気だと信じて疑わない祖父があわれだったから。
イ 祖父がまともな写真をとれないことがわかっていたから。
ウ 写真撮影に熱中して祖父が体調をくずすのを恐れたから。
エ 祖父がいい写真を撮ろうと無理しているのが心配だから。

(3) 文章中に C もういいよ、おじいちゃん、 E もういいよ、おじいちゃん とあるが、そのときの「僕」の心の状態を表現している言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の**ア**〜**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア C=拒否　E=はげまし
イ C=当惑　E=満足
ウ C=いたわり　E=感謝
エ C=失望　E=なぐさめ

(4) 文章中に D 十八年間の克明な自分自身の記録 とあるが、このことを具体的に表現している部分を、文章中から**抜き出して、はじめと終わりの五字**をそれぞれ書きなさい。

六 次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

趣味は何かと聞かれた時に、読書をその一つにあげる人の数は、一体どのくらいあろうか。小学校から大学まで宿題や試験になやまされることの少なかった時代に、少年期、青年期をすごした私[a]――家じゅうがさまざまな種類の書物で一杯になっており、しかもその大部分が大人向きの書物というやや異常な環境の中にあった私にとっては、読書は趣味的であるよりも、むしろ条件反射的行為に近かった。それは食事をしたり、お菓子を食べ[b]たり、果物を食べたりすることと類似した、日常的習慣になってしまっていた。

その頃から今日までの間に、時代はすっかり変わった[c]。私のおかれている環境も違ってしまった。読書よりも、テレビを見ることの方が条件反射的行為[A]に近くなってきた。そうなってきたのも別に不思議ではない。テレビの画面の中で動いている[d]人たちの姿を目で見ながら、彼等の発する声を耳で聞くという行為にくらべれば、紙の上に蟻の行列のように長々と続く文字を順々に目で追うてゆくという行為は、もともと不自然であり、奇妙でさえもある。

ところが、よく考えてみると、事態はもっと奇妙である。言葉をつくりだし、文字をつくりだすことによって、思想が芽をふき、成長することができた。思想と手わざとが協力することによって、科学へと発展した。そこから生まれたものが、映画であり、ラジオであり、テレビであった。私たちは、それ等を享受するのに、本を読む時ほどに頭を使う必要がなくなった。しばらくの間、あたえられたもの[B]を素直に受けいれておればよい。すんでしまってから後、私たちの頭の中に沈着するもの[F]おめえには、もう何も言うことはねえよ　とあるが、このときの祖父の口調と気持ちを説明した次の文の［①］には**十字以内**、［②］には**十五字以内**で、それぞれに入る言葉を書きなさい。

> 飾り気のない一本気な性格の祖父は［①］であっさりとこう言ったが、心の中では、［②］しているのである。

のも少ない。それはそれでよいとしても、困るのは私たちが落ちついてものを考える機会や習慣がへらされることである。科学文明が進んだ結果として、それを生みだした頭脳の創造的活動の源泉の一つがかえって枯渇(注)しそうになってきたのである。

もちろん読書以外にも、頭脳の創造的活動を活発にする仕方はいろいろある。特に自然科学系統では、実験をしながら、［C］という仕方が大きな比重をしめている。もっと一般的にいっても、書物や専門雑誌を読むよりも、他の学者たちとの会話、討論などを通じて、思考活動を活発にする場合の方が、近頃ますます多くなってきた。

よかれあしかれ、読書の比重は小さくなってゆく運命にあるのかも知れない。しかし、そうなればなるほど、読書の楽しみは、ますます珍重すべきものになる。本を読んでいるうちに、本のつくりだす世界に没入してしまえたら、それは大きな喜びである。本を読んでいるうちに、いつのまにか本をはなれて、自分なりの空想を勝手に発展させることができたら、これまた大いに楽しいことである。

（湯川秀樹『本の中の世界』による。）

（注）枯渇＝尽き果てて、なくなること。

(1) 文章中の～～(a・b・c・d)の四つの動詞のうち、一つだけ**活用の種類の異なるもの**がある。その符号を書きなさい。

(2) 文章中の A 条件反射的行為 とほぼ同じ意味の言葉を文章中から**抜き出して、五字**で書きなさい。

(3) 文章中に B あたえられたものを素直に受けいれておればよい とあるが、筆者があげている「あたえられたもの」の具体例を説明した次の文の［①］には**三字**、［②］には**七字**で、それぞれに入る適当な言葉を書きなさい。ただし、［①］は文章中から**抜き出す**こと。

> 私たちは、［①］の画面の中で動いている人たちの姿や彼等が発する声を、［②］しているのである。

(4) 文章中の［C］に入る言葉を、「計算」を使って**十字以内**で書きなさい。

(5) あなたは「読書の楽しみ」についてどう考えますか。次の**条件**にしたがい、**注意事項**を守って書きなさい。

（条件）

① 本文は**二段落構成**とし、**八行以上、十行以内**で書くこと。

② 前段では、文章中の「読書」についての筆者の考えを簡潔にまとめること。

③ 後段では、文章中の「読書」についての筆者の考えに対するあなたの意見とその根拠を書くこと。

（注意事項）

① 氏名や題名は書かないこと。

② 原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。

ただし、～～や――などの記号を用いた訂正はしないこと。

七　次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

邯鄲(注1)の民、正月の旦をもつて鳩を簡子(注2)に献ぜり。簡子大いに悦び、厚くA＿＿これを賞す。客(注3)B＿＿そのゆゑを問ふ。簡子曰はく、「正旦に放生して、恩有るを示さん。」と。客曰はく、「民、君のこれを放たんと欲するを知らば、競つてこれを捕らへんとして、ころす者衆からん。君もしこれを生かさんと欲せば、C＿＿しかず、民を禁じて捕らふるなからしめんには。D＿＿捕放之は、E＿＿恩過あひ補はず。」と。簡子曰はく、「然り。」と。

（『列子』による。）

（注1）邯鄲＝晋にある都市。
（注2）簡子＝趙簡子。晋の家老。
（注3）客＝簡子の客人（列子自身）。

(1) 文章中のA＿＿これ が指している最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　邯鄲の民　　イ　簡子　　ウ　鳩　　エ　客

(2) 文章中のB＿＿そのゆゑを問ふ を現代仮名づかいに改め、**すべてひらがな**で書きなさい。

(3) 文章中のC＿＿しかず は、「一番です」という意味であるが、具体的にどうすることが一番だと客は言っているのか。**二十字以内**で書きなさい。

(4) 文章中のD＿＿捕放之 は、どのように訓読するか。「捕放レ之ヲ」をもとに、**すべてひらがな**で書きなさい。

(5) 文章中のE＿＿恩過あひ補はず は、「せっかくのよい行いも、罪深さをつぐなうことができません」という意味であるが、客が言おうとしていることを、具体的に何がよい行いで、何をすることが罪深いのかわかるように、**四十字以内**で書きなさい。

国語　第１回　解答と解説

【解答】	【配点】
一　(1)　(例)　人々がみんなで空をかついでいる様子。　(2)　社会　(3)　子どもよ (4)　ア (5)　(例)　社会が、決して素晴らしいだけのものではなく、悪い部分やさまざまな問題を持っているということ。	一　(5)４点 他各２点×４
二　(1)　した(う)　(2)　つつし(む)　(3)　ちょうほう　(4)　しょうめつ	二　各２点×４
三　(1)　鋼　(2)　従(う)　(3)　約束　(4)　綿密	三　各２点×４
四　(1)　①　イ　②　エ　(2)　B　イ　C　ア　(3)　①　ました　②　したがって	四　各３点×３ (1)〜(3)完答
五　(1)　エ　(2)　イ (3)　(例)　まさか、太がいきなりほんとに泳いでいくとは思わなかったから。 (4)　そして太の目の前ですっと立った。 (5)　①　うきたった　②　意味もなくさけんだ	五　(3), (5)各４点×３ 他各３点×３
六　(1)　c　(2)　なにより、　(3)　(例)　心豊かに生きる時間 (4)　①　はねつるべ　②　わずかな労力で簡単に水を汲み出す (5)　(例)　日々の労働に追われて人は「何のために」という目的意識を忘れがちだが、このような意識を持たないかぎり、人間らしく心豊かに生きる時間を過ごすことができないと筆者は述べている。 私たちも、学校生活で日々の勉強に追われて、「何のために」勉強するかという目的意識を忘れがちだ。将来、社会に出てどうすれば心豊かに生きられるかよく考えることが必要だと思う。	六　(1)２点　(5)12点 他各３点×４
七　(1)　(例)　桜は、日本独特の花で、最も優れて美しい。　(2)　ウ　(3)　うえしという (4)　(例)　梅は、花の咲く時期が早過ぎて、残雪に交じって咲く梅を見ると、寒々と感じられる。 (5)　エ	七　(4)４点 他各３点×４

一　放送による聞き取り

二　漢字の読み取り

三　漢字の書き取り

四　文法

五　小説の読解

(1)　Aは，心の中のやけくそな叫び声にかき消されて，周囲の声は聞こえていない。Dは，一生懸命，必死に泳ぐことに集中していたので，周囲の様子は見えていない。

(3)　ブイに着いたときの「まさか，いきなりほんとに泳いでいくとは思わんかった。」という米田老人の言葉に注意。太が本当にブイまで泳いでいくとは予期していなかったのだ。

(4)　ヤッチンがゴールインしてすぐ太の目の前に立った(ブイの位置を知っていた)ことから，以前にもこの辺りを泳いだ経験があることが読み取れる。

(5)　本文に，ゴールしたときの太の思いは「体はまだ水をこわがってどきどきしていたが，(やったあ。)と気持ちはうきたった。」とある。ヤッチンが泳ぎ始めたとき，「『ヤッチーンッ。』と太は意味もなくさけんだ。……もう一度さけんだ。」とある。

六　論説文の読解

(1)　cは下一段活用，c以外は五段活用である。

(2)「道具を生み出した理由」を「道具を発明した目的」と言い換えてもよい。筆者は次の段落で，「では，なぜ，人間は道具を発明してきたのか。なにより，自然から身を守るため，生活の糧を得るためだ。」と説明している。

(3)　空欄Bの内容を，筆者は「愉しみのための時間，思索の時間，あるいは無為に過ごすゆとりの時間」などと言い換えている。どんな時間かと考える。それは「心豊かに生きる時間」であろう。

七　古文の読解

《口語訳》

桜という花は(他の)すべての花よりも優れている。この花は，中国には生えておらず，我が日本の国にだけ(生えているもので)あって，美しい花の最高(のもの)である。昔，中国から輸入して植えたという梅の花も，また美しい花であるとはいうものの，(梅は花の咲く)時期がたいそう早くて，降る雪(の間)にまじって咲き出すのは，(それを)見る(私たちの着物の)袖も寒々と感じられるほどである。総じて一年の中でも，(陽気のよい)三月のころが(他の月とは)たいそう比べるものがないほどすばらしい。(三月の)日の光がうらうらと輝き，嵐の音も(まったく聞こえず)静かな季節に，白雲が(一面に)浮かんでいるように(あでやかに)咲いている桜の花にかなうものなど(他には)ないことだよ。

【採点基準】

一	(1)　同内容で可。
	(5)　同内容で可。部分点可。
四	(3)①　「たのです」なども可。
五	(3)　同内容で可。文末が「とは思わなかったから。」でない場合は不可。
六	(3)　同内容で可。「心」がない場合は不可。
七	(1)　同内容で可。
	(4)　同内容で可。部分点可。

出典について

読解問題で使用した文章は下記の公立高校入試問題を出典といたしました。問題については千葉県の傾向に合わせて作成しました。

五…広島県　　六…岐阜県

国語　第２回　解答と解説

【解答】	【配点】
一　(1)　(例)　少女が勢いよくぶらんこをこいでいる情景。	一　(2)４点
(2)　(例)　動作を表す表現が短く重ねられており、ぶらんこが空を切るスピード感と力強さが感じられるから。	他各２点×４
(3)　ぱっとひらける視野！　(4)　ウ　(5)　(例)　子どもの心の成長	
二　(1)　あつか(う)　(2)　ひか(える)　(3)　ばくろ　(4)　せんぷく	二　各２点×４
三　(1)　預(かる)　(2)　減(らす)　(3)　温暖　(4)　推察	三　各２点×４
四　(1)　①　ありました　②　それでも　(2)　①　ア　②　イ　(3)　ウ	四　各３点×３
五　(1)　ア	(1), (2)完答
(2)　(例)　ぼくの鳩は、柴崎鳩舎の鳩に比べ、劣っていると思ったから。	五　(2), (5)各４点×３
(3)　ほかの鳩よ　(4)　ウ	他各３点×３
(5)　①　こっちが飼い主　②　鳩たちを見くだしていた	
六　(1)　c　(2)　(例)　自分の意見である　(3)　主観的な判断や感覚	六　(1)２点　(5)12点
(4)　①　(例)　自分なりの情報ネットワーク　②　意見や発想	他各３点×４
(5)　(例)　ソフト重視の世の中では、情報にも人間らしい主観的な判断や感覚が必要で、個人的な情報ネットワークから得た素材をもとに作り上げた独自の意見や発想こそが自分の個性だと筆者は述べている。 私の情報源は主に学校の友人や部活の仲間だ。親しい人々からの情報こそ人間らしさに満ちていて、自分らしい判断や感覚にふさわしい。どんな個性づくりも友人からの協力や支えが不可欠なのだ。	
七　(1)　心　不　同　如レ面　(2)　水…人の心　容器…人の顔　(3)　ようなる	七　(5)４点
(4)　ウ	他各３点×４
(5)　(例)　水が容器により形が変わるように、人により顔形が違うように、人の心も様々である。	(2)完答

一　放送による聞き取り

二　漢字の読み取り

三　漢字の書き取り

四　文法

五　小説の読解

(1)　柴崎さんの様子は，この段落の終わりに，「それから(ぼくは)柴崎さんをふりかえった。柴崎さんがにやっとして，励ますようにうなずいた。」とある。これがヒント。

(2)　直前に「柴崎鳩舎の鳩はみな，まるで生まれたときからそこにいるといったふうに落ち着きはらっていた。それに比べたら，ぼくの二引きはまったくドバトのようで，ぼくはくやしいような情けないような気がした。」とあるのが，ヒント。

(3)　さわるまでにはかなりの間があり，次の段落の終わりの方に，「紅栗をしっかりとつかみ籠から出した。」とある。そして，そのすぐ後に，「ほかの鳩よりも一まわりおおきく，骨格もつばさの張りぐあいもずっしりとした手ごたえだった。」と紅栗の感触を述べている。

六　論説文の読解

(1)　cは仮定形，c以外は連用形である。

(2)　新聞などで読んだ他の人の意見を，自分の意見であるかのように語っているのである。

(3)　傍線Bの直前に，「情熱，感情，情念といった言葉と同様，『情報』にも人間らしい主観的な判断や感覚が必要なのだ。これは，明治，大正期の代表的作家である森鷗外がドイツ語から翻訳した言葉らしい。」とあるのがヒント。

(5)　情報にも人間らしい主観的な判断や感覚が必要で，個人的な情報ネットワークから得た素材によってつくり上げた自分独自の意見や発想こそが自分の個性だという本文の要点をふまえて，自分なりの情報ネットワークの作り方などを具体的に述べるとよい。

七　古文の読解

《口語訳》

心に同じものがないということは顔に同じものがないということに似ている。たとえば水(の形)が(それを入れる)容器(の形)のままになるようなものだ。

人の顔というものは，千万人を集めても同じ顔をした者はいないものだ。人の心も，それと同じように，千万人の中にも同じような心を持っている者は，いないものなのだ。そのことを，顔に同じものがないということにたとえたのである。

また，水(の形)が容器(の形)のままになることにたとえている。水は，たいへんやわらかいので，四角や丸い容器(の形)のままになるため，角のある容器に入れれば，角ができ，丸い容器に入れれば，丸くなるのである。

【採点基準】

一　(1)　同内容で可。
　(2)　同内容で可。部分点可。
　(5)　同内容で可。
五　(2)　同内容で可。文末が「と思ったから。」でない場合は不可。
六　(2)　同内容で可。「意見」がない場合は不可。
　(4)①　同内容で可。
七　(5)　同内容で可。部分点可。

出典について

読解問題で使用した文章は下記の公立高校入試問題を出典といたしました。問題については千葉県の傾向に合わせて作成しました。

五…長崎県　　六…佐賀県

国語　第３回　解答と解説

【解答】

一　(1)　エ　(2)　イ　(3)　テレビの方が魅力的である
　(4)　(例)　西田さんは、テレビで娯楽番組ばかり見ていると、思考力や漢字の知識や読解力など国語力が落ちると指摘している。
　西田さんの言う通り、テレビを見るのには問題点もあるのは確かだが、ためになる番組をしっかり選んで、その情報を上手に利用するなどの工夫をしながらテレビを見れば、テレビも立派に役立つと私は思う。テレビも見方次第で、教養を身につけることができるに違いない。
二　(1)　やと(う)　(2)　はず(む)　(3)　だくりゅう　(4)　ちゅうしょう
三　(1)　除(く)　(2)　招(く)　(3)　安否　(4)　幼虫
四　(1)　いただく　(2)　エ　(3)　ウ
五　(1)　a　(2)　ウ　(3)　①　音のない時間　②　音の絶え間　(4)　心理的な間
　(5)　ア
　(6)　(例)　異質なもの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させる(働き。)
六　(1)　ア　(2)　「裏切った」人間がその上を歩く　(3)　さむさ
　(4)　ア　(5)　家に拒まれている自分を感じた(こと。)
　(6)　はじめ…まだ、卵の　終わり…い建てもの
七　(1)　イ
　(2)　(例)　ぼんやりとしか見えないものであっても、見のがすことが
　(3)　きょうは　(4)　なし
　(5)　(例)　自分の健康を過信している人の方が病気になりやすいのである

【配点】

一　(1)２点
　(2)，(3)各３点×２
　(4)12点
二　各２点×４
三　各２点×４
四　各２点×３
五　(1)，(2)各２点×２
　(5)，(6)各４点×２
　他各３点×３
六　(3)〜(5)各４点×３
　他各３点×３
　(6)完答
七　(5)４点
　他各３点×４

一　放送による聞き取り

二　漢字の読み取り

三　漢字の書き取り

四　文法

五　論説文の読解

(1)　aは五段活用，a以外は下一段活用である。

(2)　日本の家屋は，さまざまな間仕切りの建具で仕切られてはいるが，必要に応じて，簡単にとりはずしたり，つないだりできるようになっているから。

(3)　西洋の音楽は，音のない沈黙の時間を恐れるかのように，一瞬のすきもなく，音で埋め尽くそうとするが，日本の音楽は，至る所に音の絶え間がある。その絶え間に聞こえる自然の音，木々のそよぎや谷川のせせらぎを楽しんでいる。

(4)　空間的な間や時間的な間のほかに，心理的な間というものもあり，ここはその心理的な間の具体的な内容を説明している。

(5)　本文に「日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。」とあるように，日本の文化では，空間的，時間的，心理的，……などさまざまな場面で，間というものを上手に使いこなしているからこそ，間の文化といえるのである。

(6)　筆者は「心理的な間」について、「日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。」「日本人の生活や文化の中で、この間のもっとも重要な働きは異質なもの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させること、つまり、和を実現させることである。」「意見の異なる二人のあいだに十分な間をとってやれば、互いに共存できるはずだ。」などと述べていることから、間の働きを読み取ることができる。

六　小説の読解

(4)　筆者は「はじめて引っ越しそのものに嫌悪を抱いたのは，十五歳の冬だった。」と言い，その後も，引っ越すときに感じる嫌悪の気持ちを書きつづっている。

(5)　筆者は，本文中で「家は，人が住むのを止めるつもりでいることを敏感に察知するものだと知ったのはそのときだと思う。家に拒まれている自分を感じたのも，そのときがはじめてだ。」と言っている。

(6)　本文の最初でそのときの様子を，「――ああ，帰ってきたな。まだ，卵の先っぽのところは鉄筋の骨組みをあらわにしている白い建てものを見たとき，わたしは胸の中でちょっとホッとしながらそう呟いて背中をシートに委ねた。」と，具体的に語っている。

七　古文の読解

《口語訳》

「私は健康そのもので，遠方の里まで歩いていったとしても疲れることがない。」という人は，たいてい足の病気になる。「私は目がいいからだろうか，はるか遠くのものや，ぼんやりとしか見えないものでも，見落とすことがない。」という人は，必ず目の病気になる。「きょうは頭痛がして，きのうは胸のあたりがつまった。」と，毎日言っている人は，大きな病気になることがほとんどない。「若いときから薬を飲んだことがない。病気にはぜんぜんなったことがない。」という人は，急に大病になる。

【採点基準】

五　(6)　同内容で可。部分点可。
七　(2)　同内容で可。部分点可。
　(5)　同内容で可。部分点可。

出典について
読解問題で使用した文章は下記の公立高校入試問題を出典といたしました。問題については千葉県の傾向に合わせて作成しました。
五…青森県　　六…山梨県

国語　第４回　解答と解説

【解答】

一　(1)　(例)　太陽エネルギーが地球に当たって熱に変化したもの。
　(2)　二十億(分の一)　　(3)　やかん
　(4)　(例)　地球から逃げていく熱をたくわえたり、その熱を地球にもどしたりする役割。
　(5)　エ
二　(1)　せま(る)　　(2)　こ(る)　　(3)　じゅんたく　　(4)　ちょうしゅう
三　(1)　優(しい)　　(2)　操(る)　　(3)　往復　　(4)　保管
四　(1)　①　イ　　②　エ　　(2)　①　希望　　②　そのために　　(3)　ア
五　(1)　ｄ　　(2)　順当な結果の表現だ(から。)　　(3)　ウ
　(4)　(例)　本来逆接でつながるはずの文が、順接でつながっているから。
　(5)　①　表現意図　　②　きちんととらえ
六　(1)　はじめ…インクがし　　終わり…字の連なり
　(2)　はじめ…書かれた内　　終わり…なかった。
　(3)　①　いつでも忠実に働いた　　②　書く　　(4)　ウ
　(5)　(例)　書くことに夢中な「私」の作業をキリコさんは、敬意を払ってやさしく見守ってくれている。「私」はそんなキリコさんを頼もしく思っているという間柄だ。
　　そんな二人の間柄はちょうどよい関係なのだろう。私がキリコさんだったら、もっと口出ししたり、干渉したりして、うるさいと思われてしまうだろう。私もキリコさんのようなお手伝いさんがいつもそばにいてほしいと願っている。
七　(1)　イ　　(2)　いつわりて　　(3)　きゅうもんせざりしをくゆ
　(4)　(例)　自分をかげから指さして非難した役人の名。
　(5)　(例)　自分が悪口を言われても知らぬふりをして、気にしないという寛容な人柄に敬服した。

【配点】

一　(4)４点
　他各２点×４
二　各２点×４
三　各２点×４
四　各３点×３
　(1)，(2)完答
五　(1)～(3)各３点×３
　他各４点×３
六　(4)２点　(5)12点
　他各３点×４
　(1)，(2)完答
七　(5)４点
　他各３点×４

一　放送による聞き取り

島村英紀「地球環境のしくみ」より

二　漢字の読み取り

三　漢字の書き取り

四　文法

五　論説文の読解

(1)　ｄは上一段活用，ｄ以外は下一段活用である。

(2)　傍線Ａの次の段落で，この理由を筆者は「前者(順接の「そのため，」でつなぐ場合)は，長い間待ちこがれた映画なので当然みんなが押し寄せて連日満員になっているという順当な結果の表現だ。」と説明している。

(3)　見に行くチャンスだとか何とか言って勧めているのだから，**ウ**の勧誘を選ぶ。

(4)　本来は逆接でつながるところを，順接でつないだから一見無理に見えるのである。

(5)　傍線Ｄより前の同じ段落で，筆者は「ことばの奥にあるはずの相手の「表現意図」のところまで「きちんととらえ」きれたときに，はじめて理解が成立するのである。」と述べている。

六　小説の読解

(3)　ふだん万年筆は，「キャップさえ外せば，万年筆はいつでも忠実に働いた」のであり，また，傍線Ｃのすぐ後では，「『どうしよう，万年筆が壊れちゃった』私は叫び声を上げた。」とある。これらをもとに，②の内容を考える。

(4)　キリコさんが敬意を払ってくれるのは，私を子ども扱いしないからで，私を温かく見守ってくれる。インクが切れて私が困っていると「大丈夫。インクが切れただけなんだから，補充すれば元通りよ」と手をさしのべて解決に導いてくれる。

(5)　(4)の解答を参考にして前半をまとめる。後半は，二人の間柄について，各自の感想は，自由に書けばよい。解答例では「こんなお手伝いさんが身近にいたらいいな」などと思いを述べている。

七　古文の読解

《口語訳》

呂蒙正は，人のあやまちを心にとめることを好まなかった。初めて執政に登用されて宮廷入りしたときのこと，ある宮廷役人がいて，簾のかげから蒙正を指さして，「こんな男でも執政なのか。」と言った。蒙正は聞こえないふりをして通り過ぎた。そこにいっしょにいた同僚がおさまらなくて，その役人の官職名と氏名をただそうとした。蒙正はあわてて押しとどめた。宮廷を退出した後も，その同僚はまだ腹の虫がおさまらず，ただそうとしなかったことを後悔した。蒙正は，「もし相手の名を知ってしまえば，生涯忘れられなくなるだろう。かえって知らないほうがよいのだ。また，相手を問いつめなかったからといって別にこちらが損をするわけでもあるまい。」と言った。この話が伝わってみな蒙正の度量の広さに敬服した。

【採点基準】

一　(1)　同内容で可。
　(4)　同内容で可。部分点可。
五　(4)　同内容で可。「逆接」がない場合は不可。
七　(4)　同内容で可。
　(5)　同内容で可。部分点可。

出典について

読解問題で使用した文章は下記の公立高校入試問題を出典といたしました。問題については千葉県の傾向に合わせて作成しました。

五…山口県　　六…島根県

国語　第５回　解答と解説

【解答】

一　(1)　(例)　作者が「食べてきたもの」に関して感じたこと。
　(2)　二行目(から)十一行目　(3)　イ　(4)　満ち足りた思い
　(5)　(例)　四十歳になってはじめて、いろいろなものを犠牲にして生きてきたことを実感し、それを悔やむ気持ち。
二　(1)　おろ(す)　(2)　かがや(く)　(3)　こうりょう　(4)　ばいきゃく
三　(1)　移(す)　(2)　効(く)　(3)　鉄棒　(4)　演奏
四　(1)　①　ア　②　ア　(2)　ウ　(3)　①　まず　②　それから
五　(1)　(例)　祖父が僕の出願用の写真をひどいピンボケで撮ったとき。
　(2)　ア　(3)　ウ
　(4)　はじめ…アルバムの　終わり…れている。
　(5)　①　(例)　ぶっきらぼうな口調　②　(例)　僕の成長を見届け、とても満足
六　(1)　ｂ　(2)　日常的習慣　(3)　①　テレビ　②　(例)　見たり聞いたり
　(4)　(例)　計算をしながら考える
　(5)　(例)　テレビなどのせいで読書を通じてじっくり考える時間が減ることを惜しむ一方で、筆者は読書の楽しみは読書の間に自由な空想にふけることだと力説する。
　自由な空想は想像力を養うのに必要である。私は、映画を見る前にその原作を読む。読む間に様々な情景を思い描く。後で自分の想像と映画とを比べ、自分の想像がよい時もあり、映画の情景に圧倒されもして、私の想像力は豊かになる。
七　(1)　ア　(2)　そのゆえをとう　(3)　(例)　民が鳩を捕らえることを禁ずること。
　(4)　とらへてこれをはなつ
　(5)　(例)　鳩を放つのがよい行いでも、民に鳩を殺させるのはより罪が深いのでつりあわない。

【配点】

一　(5)４点
　他各２点×４
二　各２点×４
三　各２点×４
四　各３点×３
　(1)，(3)完答
五　(1)，(5)各４点×３
　他各３点×３
　(4)完答
六　(1)２点　(5)12点
　他各３点×４
七　(5)４点
　他各３点×４

一　放送による聞き取り

二　漢字の読み取り

三　漢字の書き取り

四　文法

五　小説の読解

(1)　傍線Ａより一つ前の段落に「祖父の体に写真を撮る力など残っていないことを，僕は良く知っていた。……ひどいピンボケの肖像を撮った」とある。

(3)　傍線Ｃのところで，正気を失っている祖父をいたわる気持ちは，傍線Ｅのところでは，「僕」の生活記録を立派に撮り続けてくれた祖父に感謝する気持ちへと変化している。

(4)　傍線Ｄの次の二つの段落全体で，個々の記録を具体的に「アルバムの最初の一枚は，鯉のぼりを広げたスタジオの中央に，素裸の赤ん坊が大の字に寝ている写真だった。……リーゼントに櫛を入れている」と詳細に語っている。

(5)　祖父の性格から考えて，ぶっきらぼうな口調だと思われる。また，心の中では，「僕」の成長ぶりにとても満足している様子が読み取れる。

六　論説文の読解

(1)　ｂは下一段活用，ｂ以外は五段活用である。

(2)　最初の段落を振り返ってみると，「むしろ条件反射的行為に近かった。それは……と類似した，日常的習慣になってしまっていた」とある。

(4)　「実験をしながら」に合わせて，「計算をしながら」とする。科学者は実験や計算をしながらどうするかというと「考える」がふさわしい。読書をしながらじっくりと考えることが大切だと筆者は述べている。

(5)　解答例では，筆者が最後に述べている読書の楽しみに注目して，まず，自分なりの楽しみ方を述べ，次に，その習慣から得られる有益な効果をあげ，自分の意見の根拠としている。

七　古文の読解

《口語訳》

邯鄲の人民が，正月の元旦に鳩を簡子に献上した。簡子はたいそう喜んで，たくさんのほうびを与えた。客人がそのわけを尋ねた。簡子が言うには，「正月の元旦に生きものを放してやって，恵みの心が深いことを見せようと思うのだ。」とのことであった。その人は，「人民は，あなたがこれを放してやろうとしているのを知ったら，われ先にと争ってつかまえようとして，鳩を殺そうとするでしょう。あなたがもし本当に鳩を生かしてやろうと思うならば，人民をさしとめてつかまえさせないようにするのが一番です。つかまえておいてそのあとで放すのでは，せっかくのよい行いも，罪深さをつぐなうことができません。」と言った。簡子は，「もっともだ。」とうなずいた。

【採点基準】

一　(1)　同内容で可。
　(5)　同内容で可。部分点可。
五　(1)　同内容で可。部分点可。
　(5)①，②　同内容で可。
六　(3)②　同内容で可。
　(4)　同内容で可。「計算」がない場合は不可。
七　(3)　同内容で可。
　(5)　同内容で可。部分点可。

出典について
読解問題で使用した文章は下記の公立高校入試問題を出典といたしました。問題については千葉県の傾向に合わせて作成しました。
五…石川県　　六…大阪府